

討てる筈のない我身ながら、なにか知らず其處に手段があつて、討てることになるのであらう。七郎左を討つて、亡き夫吉彌の修羅の妄執を、はらすことが出来れば、これに上越す嬉しさはないけれど、しかし自分に仇が討てるのは、操を破つて肌身をけがしたから——こそだ。
(夫吉彌どのに捧げた操を、奪はれたが爲に、たとひ仇七郎左を討てたにしても、噫なんといふ淺間しさ！)

さう、思ふと、泣かすにはゐられないのであつた。
女の一つしか無い貞操を、守るために末森の城内で、勘十郎信行の初戀をも、拒み、それから佐久間七郎左の戀慕をも躲さうとして、つい惹き起した慘劇だつた。夫を闇討ちにした七郎左への恨みは、よしんば身も世もなく深いにせよ、操を汚したことを償ひにして義龍の、助けを借りては、およそ意味ないどころか、悲しい極はみなのである。

(討てないよりも、もつと情ない！)
だが、義龍は、是々爾々と、詳しく説明した。奉納試合の當日には、斯んな場合は怎うするかを、一々教へたのだ。

悲しくはあつたが、か弱い自分にも仇討が出来るにちがひない手段を、云ひ聞かされてみると、さすがに嬉しかった。涙に濡れながらも、心は躍る。



やはり、身を碎いても討ちたい仇だつた。

いかなる犠牲を拂つても、憎い七郎左を殺したかつた。義龍の手籠めに逢つた時、たうとう自害出來なかつたのは、何としても七郎左へ、怨みを返さずには死ねなかつたからであつた。

「お勝！ 笑つて呉れ」

「はい！」

彼女はつひに、義龍へ悲しい眼を見せた。

伊奈波の社頭

(一)

神殿の傍らには、三本杉があつた。

廣前の唐門を越えて、廻廊の石垣下へ、階段をおりると、左手には烏帽子岩があつた。その側には、手洗水の石鉢があつた。さらに其の左には、鐘撞堂が建つてゐた。それと、繪馬殿が並んでゐた。この繪馬殿と相對して、階段の右手には、御神樂所と、御輿庫とがあつた。階段から、大きな石燈籠の間を通りぬければ、拜殿に突きあたる。拜殿の左右には、石燈籠が立ち、この拜殿と唐門とは、第二の廣前ともいふべき前庭を挟んで、對ひ合つてゐた。で、拜殿の正面から、ふたゝび階段をおりれば石鳥居までが第三の廣場だ。

奉納仕合は、この第三の廣場で行はれるのである。

廣場のぐるりには、觀覽席の棧敷が組まれてゐた。拜殿の左に設けられた棧敷には、道三入道が坐

つてゐたし、右の棧敷には、義龍が魁偉な體を、どつしりと据ゑてゐた。他の棧敷よりも、石垣の高さだけ高いのだ。つまり、重臣たちの棧敷はみな、石垣の下に並んでゐるのだつた。どの棧敷にも、溢れて落ちこちさうに人が、つまつてゐた。

引きめぐらされた梶の葉の定紋幕。

幕そとにも、やはり人が、箱詣の詣詰みたいた。また鳥居外の參道も、おなじやうに身動きのならない人の群れだし、おまけに林の中も、丘の上も、おびたゞしい人の數だ。

だが、おなじく人集りでも、場所によつて人の種類が違つてゐた。これを大別けに分けると、仕合の光景を眺めることが、出来る人たちと、出来ない人たちだ。

眺め得る者は、武士だし、眺め得ない者は町人や百姓だ。

と、いつても、武士のなかにも、豊棧敷もあれば、幕外もあつた。たとひ豊棧敷でも、形が見えるのはいゝとして、幕張の外からでは、棧敷の上の見物人の、足の裏が見えるだけだ。

足の裏と眺めつこが關の山では、林のなかの茶店に陣どつて、影ながら他人のどよめきでも聞かうといふ町人どもよりも、はるかに氣が利かない。

「おい頼だなあ」

「む。いよいよ始まつたらしいぞ」

「面白さうだのう」

「ちえッ、俺ア塵埃を丸ッ被りだ」

「道理で面黒い」

「何が面黒いのだ？」

「貴公の面がよ」

「ふ、貴様だつて、鼻黒馳鼠だい」

「糞、大かい屁でも聞かさうかー」

「はッはッは、馳鼠の最後屁といふ奴か？」

「最後屁なら、大かいよりか臭いのだ」

「最後の勝利は誰方かなう？」

「残念ながら優勝は、鷲山方へ取られさうぢやよ」

「鷲山の御指南役、梅津玄旨齋殿を、打敗かすものは無かりさうだ」

「いや玄旨齋は出まいよ、おそらく」

「あの方に出られては堪らん」

「出ないとしてもだ、あちらには——」

「猛者、猛者、猛者だ！」

「ばかに毛深さうだな」

「馬鹿野郎！ あちらには小牧源太殿がゐる」

「こちらには、左右田主殿允が御座らつしやるぞ！」

「左右田とも、左右田とも！」

「わは、、、、！」

「わひ、、、、！」

(二)

道三入道のわきには、喜平次龍元がゐた。孫四郎龍之がゐた。

次男と三男である。

道三の夫人、明智氏の腹だから、信長へ嫁いだ濃姫とは、母の同じい兄弟だった。

道三は日頃、義龍と言ひ諍つて、獨活の大木だの、智慧のまはらぬ山車圖う體だのと、罵る場合に、よく二人の弟ども喜平次・孫四郎に對しても恥ぢると、さういつたものだ。だが、道三のこの言

葉には、毫も道理なところが無かつた。喜平次も、孫四郎も共に甚だ不肖の息子だった。一代の梟雄たる齋藤道三の實子としては、むしろ申分なく足りない子供だった。と同時に、明智の血統から見ても、やはり一向に相應しからぬ外孫たちであつた。そして濃姫から云へば、全く不似合な兄どもだった。じつさい濃姫のみは、いかにも明智の外孫らしく、また流石は道三の愛姫よと領かれる息女なのであるが、喜平次、孫四郎には、まつたく何處にも是と云へるやうな、すぐれた點は見えなかつた。しかし、道三にとつては、義龍は實、表面だけの總領にすぎないから、これを罵倒するとなれば、不肖と知りつゝも自分の實子を、さも偉さうに引き合ひにも出す。これは要するに人情の、ごく自然な、有りがちの傾向だらう。だが然し――

この不肖の子についての説明は、後には役立つが、今は不必要だったかも知れない。

こゝでは單に、喜平次と孫四郎とが、父と同じ棧敷で、奉納仕合を見物してゐることが解ればいゝ。で、義龍の棧敷には、今年七つになる一子、辰王丸がゐた。義龍が十七歳の時に生れた子で、これが後に信長と決戦する龍興になる。

辰王丸が、今日、鷺山から父に伴れられてきて、この棧敷にゐるといふことは、この場合、けつして小さくない意味があつた。つまり義龍は餘ほど工夫を、こらした結果、伴れて來たのだ。

辰王丸が來たことは、稻葉山の上下を、安心させるには充分だった。義龍に何等かの異心が、もし

有るなら、なんで七歳の一子を同伴しよう。——と、さう思はせるためであつたのは、いふまでも無からう。

「うわあーっ！」

どよめく聲々。

それは、仕合に勝つた者への、賞讃の喚き聲であつた。

「只今の勝負——勝ち、牧村丑之丞殿！」

と、叫び知らせる音聲が、ひびく。

それは、場外の群衆へも、勝敗を告げ聞かせるといふ、極めて親切な遣り方だつたのである。

「牧村丑之丞殿の勝！」

と、石鳥居わきの、車藏の前に建つ櫓の上で、叫ぶ聲が、繰返した。

「うわあーっ！」

群衆が、勝ち人に對して、歡呼の鬨をつくつた。

場内の仕合は、五人抜き退きの優退だ。

「うわあーっ！」

五人の劔士を破り抜くことの出来た優退者に對して、仕合場の内外は、その名譽を讃へる叫び聲を

さながら雷のやうに、轟かせた。

仕合は進行した。

五人を抜き得た優退者は、牧村丑之丞、安藤左京亮、左右田主殿允、小牧源太の四劔士といふことになつた。

さて、最後の優勝は何人か？

この四劔士が、榮冠を目がけて、技を闘はすのである。

(三)

牧村丑之丞は、木劔を振りかぶつた。

これに對して、りうつりうつと安藤左京亮が、三間柄の木槍をしごいた。

長槍の穂先が、すばらしい速さで、牧村の股間を掬つた。

安藤の手練が、

「ええっ！」

と、掛聲諸共に、槍の柄を捻つた。

控つ！

もんどり打つて、牧村が、地に仆れた。

かと思ふ間に、その軀は、驚異に値する技で、起き上つた。

それは立つたとは見えなかつた。異常な速度で、さながら轉ぶが様に、相手の足許へ迫つたのだ。

そして木劍が、車切りに、横ざまに、薙ぎ拂はれた。安藤は躲すために跳躍した。かうなれば長槍は最早、無用の長物だ。長ければ長いほど、邪魔で厄介だ。捨てる外に手が無い。安藤は、跳びあがりながら腰の木刀を、槍に替へたが、遅かつた。したゝかに向う脛を叩かれた。骨が碎けたやうにも感じられた。安藤は、それでも地べたに倒れた時、立たうとした。しかし立てなかつた。

「負けたッ！」

と、不本意ながら叫んだのである。

審判者、梅津玄旨齋は、牧村の勝利を宣告した。

やがて、次の勝負は、この牧村・對・左右田主殿允だ。

ぐるりの棧敷は熱狂して、

「牧村ア！」

「左右田ア！」

と、叫び立つた。

太鼓の音を合圖に、兩劍士は、互に木劍を構へた。

「やあ！」

「おう！」

氣合の聲が交された途端に、電光石火の比喩そのまゝに、兩體と兩劍が、とび違つた。——と、見えた時、早くも審判者の右手は、高く揚がつた。

「左右田！」

聲が、勝名乗を宣した。

見物は、眼を睜つた。

——ふたつの體は、重ね餅になつてゐた。しかし、よく見ると、左右田は牧村を組伏せてゐたのであつた。

少憩の後、つひに最後の決勝だ。

「うわあーっ！」

「小牧いー！」

「左右田あア！」

まさに熱狂は白熱した。

満場騒然たる聲援である。

この勝負一番によつて、美濃の第一剣が定まるのだ。

今みんごと牧村丑之丞を破つた左右田が、劍豪小牧源太と雌雄を決するのである。

果然——稻葉山と鷲山の對抗となつたから、見物の力瘤はまた一入だ。こゝ稻葉山の地元方は、

(ほまれの優勝を、攫はれてなるものか)

と、左右田の名を叫び喚いた。

だが鷲山方でも、

(神道流の奥儀を極めた達人が、なんで敗けるか)

と、息巻く。

一人々々の息巻き態は、敢て劣りはしなかつたが、せいゝ数取ほどの小人数では、とても稻葉山の大家には及びもつかない。集團としての聲量が、足りない。聲を囁らしてまで叫んだけれど、無念や壓倒されてしまつた。

(四)

小牧、小牧といくら叫んでも、地元の聲援に押し潰されて、響かない。

(もつと大勢で来るのだつた。そもゝ殿がお悪いのだ。なぜ、これツばかりの小人数で、お出ましなされたのだらう?)

鷲山の家来どもは、主君義龍の目的が、怎所にあるか無論わからないから、みんなが氣を採み腐らせた。

だが、さしも喧騒な聲援も、太鼓の音が聞えると共に、びたツと静まつた。

左右田、小牧の兩豪は、かなり間隔をおいて構へた。すでに——観衆は固唾だ。

決勝の仕合開始!

地摺り青眼の、相構へである。

中條流は、越前國、宇坂の莊、一乗淨教寺村の土豪、富田一族によつて榮えた劍法であつた。この劍法を學んで、拔群の域に達した佐久間七郎左だつた。この七郎左——左右田主殿允が勝つか? 天眞神道流の大家、梅津玄旨齋の秘術を得て、出藍の技のある小牧源太が果して左右田を凌いで、今日

制覇をなすか？

相構への、木劍の尖と尖とが、しだいに相迫つた。じりじりと地摺り青眼が、間を詰めた。しかし又も、相互に動きを停めたかのやうに見えた。見物の侍たちは、

(左右田の顔が、蒼く成つた)

(小牧の眼が、びかり光つた)

(こりや源太の方が、優勢だ)

(怎うやら主殿尤が、負けさうだ)

と、思つた。

事實、左右田自身も、あきらかに劣勢を感じた。物凄く面疵のある左右田の顔が、一そう蒼味を増した。けれども左右田は、敗れたくなかつた。で、壓され氣味を挽回するために、

「えゝつー」

必死に、氣合を充實させた。

と、俄ぜん！ 木劍が、小牧の手から、地に落ちた。

こは如何に！ 落ちたのではない。からり木劍を、小牧は投げ棄てたのである。

「参つたッ！」

この刹那に、

「勝負あり！」

梅津審判の右手が、さつと掲げられた。

満場は、地元も鷲山方も引ツくるめて、根こそぎ豫想を、でんぐり覆されたに違ひなかつた。呆然となつて、口を張だけ開けた。喚き叫ぶべき聲をも呑んだ。

しかし乍ら、當の小牧が敗を自認し、審判者が、明瞭に、

「左右田主殿尤の勝」

と、勝名乗をあげたのだから、さう何時までも聲を、呑み続けられもしなかつた。誰も彼も、一旦呑んだ聲を、一倍烈しく吐き出した。

いまや場内は、總立ちで、強豪左右田の名譽を讃へた。美濃第一劍を歡呼した。

だがその歡呼の嵐を聞きながらさすがに道三入道は、ひそめた眉を開かなかつた。老たりと雖も、武藝鍛錬の眼は、曇らなかつた。

(わざと負けたのは何故であらう？)

あれか、これかと、疑つてはみたものゝ、正體らしい何等の的りが掴めなかつた。起伏と波瀾が殆ど萬丈の、經驗を積み、辛辣な人生の表裏を潜りぬけて來た道三ではあつたけれど、その劫を経た洞

察の力を以つても、

(まるで、解せない！)

と、思ふほか無かつた。

それは兎にかく、今日の仕合の第一人者となつた左右田は、まづ神前に額づいて自分の武運を謝してから、道三入道の棧敷へ登つて行つた。

(五)

優勝者へは、道三入道と義龍の双方から、優勝の杯と、賞與の引出物とが、與へられることになつてゐた。

左右田主殿允は、道三の棧敷で、授けられた銘刀兼氏を押頂いて、

「身に餘る面目——」

と、謝辭を述べた。

素性はつゝみ、名は變へても、單純な性質は變じよう筈のない佐久間七郎左だつた。劍には強くて、他の點では皆目すぐれてはゐない此の七郎左の主殿允だから、自分が、美濃第一の劍豪になり得

て、この國で鍛へられた名刀として名高い、志津三郎兼氏作の一振を、國主道三から拜領したことはまつたく有頂天に嬉しかつた。

(相手の小牧の敗け方は、はなはだ訝しな敗けぶりだつたが、しかし俺の勝つたことは事實だ。本當に勝つたのだ。それが嘘でない證據には、この通り俺は、志津三郎兼氏の名刀を授けられたではないか。館が、兼氏だと云つて下すつたのだから、真正正銘の兼氏に相違ない。で、偽作物でないとするば、大變な名譽だ。大變な名譽を擔つた俺は、だから怎んなにも喜んでいゝ譯だ。さあ、歡べー！ さあ笑へー！)

面疵で引釣つた顔を、一層引釣らせて、にたく笑つたのであつた。

左右田の考へに従へば、相好のくづれるのは、いかにも道理だつた。

(人の劍が未熟なせるではない。やはり俺が強いのだ。俺が感じてゐたよりも一段と、俺の劍は傑れてゐるのだ)

兼氏の名刀を、いとも大切さうに抱へて、道三の棧敷から降りた左右田は、

(鷲山の褒美は何だらう?)

さう思ひつゝ、義龍のゐる棧敷の梯子を登つた。

「天晴ぞ左右田！」

「はー」

「主殿允！」

「僂伴で御座ります」

「む、勝つて誇らずか。しかし謙遜は無用ぢや、近う」

義龍は、離れて畏まった左右田を、さしまねいた。近く進み出ると、杯をとらせて、

「打物とつての腕前、伎倆は、とくと見物出来て感服いたした。お許のごとき猛者を有つのは、わが美濃の誇りであらうぞ」

「はー 過分なる御賞美、恐れ入りまする」

「武藝自慢の予も、お許の前には兜を脱ぐ。さぞかし臂力も勝れてをるだらう。ちよつと試させては呉れまいか？」

「え？ 何と仰せらるゝ？」

「はゝなに、ほんの鳥渡の試しぢや」

義龍の巨きな體が、座を立つた。

「御試しとは？」

と、左右田は、近づいた義龍を、怪訝げに眺め上げた。

「その腕に觸らせて貰ふだけぢや。第一人者の筋骨が、いかに硬いか？」

さういひながら義龍は、ほとんど仁王の腕のやうに節瘤立つ自分の兩腕を、つと差延べて、逞しい指で、左右田の左右の二の腕をむづと掴んだ。

「あー」

「うむ、こりや硬い硬い！」

「殿っ！」

と、左右田が、愕き聲で叫んだ。

何が鳥渡だ？

掴んだ方は、或は鳥渡かも知れぬが、なにしろ三十人力の怪力だ。

筋肉が痺れ、骨が挫げるかと思はれたのである。

(六)

(あ痛たゝゝ何を？)

驚愕と憤怒とが、こつちやになつた。

「何を、何をなされますッ？」

「刀を持たぬ腕つ節の、力試しだ」

「あゝ殿ッ、こりや……お血迷ひかッ？」

「ふゝ血迷ふものか！」

義龍が、金剛力で掴み据ゑてゐるので、左右田は、起たうとしても起てない。

「しゝ然らば、何故のお悪戯ぢやッ？」

さう、叫ぶと、

「悪戯どころか、予も一生懸命の助太刀だ」

「え？ なゝ何と？」

「わし自らは太刀を抜かすの助太刀ぢや」

と、義龍が云ひも終はらぬ時、押し据ゑられてゐる左右田の背後へ、つつと廻つたのは誰あらう、小姓の勝彌、すなはち、お勝だ。義龍の側近の人々を、おしわける様にして今、左右田の背に近づいたのである。

道三の機敷からは勿論、この有様は見えた。だが、明察な道三入道にさへ、目に見える光景が何を意味するかは、まるで解せなかつた。杯をとらせたまでは、いゝけれど、突如、義龍が座を立つて

左右田の双腕を捉へた。そして捉へた者と、捉へられた者とが、何事か知れぬが大声で言ひ合つてゐる。と、遠目にも美しさの目立つ小姓が一人、女よりも猶たをやかな體つきで、だが怖ろしく蒼い顔色をして、現れたかと思ふと忽ち、左右田の背中へ近づいたではないか。

これを眺める幾百千の眼が、たゞ一齊に墜られた。ちやうど其時であつた。義龍が、聲をかけた。

「それッ！」

左右田は、背後に殺氣を感じた。

(あッ！)

體は動かないから、首だけが後ろへ、ねぢ曲つた。途端に、

「夫の髻、佐久間七郎左！」

お勝の白い手に、短刀が光つた。

「やあッ！」

左右田は、渾身の力で突立たうとした。

しかし遮る力は、三十人力！

義龍の怪力は、もがく左右田を依然、壓ッべし續けた。

「刺せッ！」

と、義龍が勵ました。

「覺悟っ！」

お勝のわななく腕が、かぼそい腕が、刃を、鈍子尖を、仇の脊中の稍真中へ、突きたてた。

「わ、おのれッ！」

と、左右田が叫んだ。義龍は、

「さあ突き通せ！」

と、又もお勝を激勵した。

非力ながらも、仇討ちたさに凝つた一念。

ありつたけの力で、一押し、二押し、三押しと、しだい深に、深々と、胸へ、急所を、貫きこぐる。

鮮血は、シユウシウツと迸走つて、白い手を、白い顔を、朱に染める。

「うぎあアあッ！」

それは、物凄い絶叫であつた。

「夫の恨みを、晴らす勝ちや！ 七郎左、思ひ知つたかッ！」

と、さらに一えぐり。

「う、う、ウ、うッ！」

猛獸が哮ぶやうに、猛然と、七郎左は、死力を搾つた。

にも拘らず、三十餘貫の巨體からの重壓は、いはゞ千曳の岩であつた。

左右田の七郎左は、自分の頭の中と、胸の内とに、眞紅の火炎を感じた。

(討たれた！)

紅蓮が、遽に黒い、闇に變じた。

復讐の刃に、心臓が裂かれたのであつた。

(七)

榮えある優勝者が、褒賞の杯を取らされた其場で、背後から突如刺されたのである。しかも突刺したのは蕪たい色若衆であり、今の今、美濃の第一劍たることが證明された劍豪を、その色若衆の纖手に容易く刺させたのは、思ひがけもなく出現した闘入者ともいふなら、まだしも、餘人でもない館の若殿、鷺山の城の主なのであるから、人々の驚愕は、輪に輪をかけた。満場の、棧敷の上も、棧敷の下も、騒然と總立ちになつた。そして叫ぶ聲と喚く聲とが、たとへば蜂の巢を叩きこはしたかのやうに奔めきあつた。混乱した。交錯した。

そのとき小牧源太が、大音聲を上げた。

「やあ〜各々、静まれい！ 静まり候へ〜」

——最後の決勝仕合で、左右田に妙な敗け方をした小牧源太だ。

義龍の棧敷の突端に立つて、大きな聲で喚はつたのである。

小牧の聲は、喧騒を壓して響いた。

「仇討ちやア！ 仇討で御座るぞウ〜」

さつき仕合の行はれた場所は、すでに一ぱいの人の波であつた。

「敵討だによ〜」

「復讐だによ〜」

侍どもが口々に呷鳴つた。

小牧の聲が、

「正義貞節の仇討が只今、遂げられたのだ。かくいふ拙者、主君義龍の殿に代つて、各々へ、申聞かす。よく承はれ、こゝに討たれし左右田主殿尤こそは、去年尾張の未森城下にて、津田吉彌なる者を卑怯にも闇討に致して出奔せる、佐久間七郎左衛門なり。尾張武士に其人ありと聞えたる、佐久間の次弟でありながら、犯せる破廉恥おしつゝんで、世を偽れる悪業も、つみに報いてまッ斯の通り、

若衆姿に身をやつせし、勝と呼ぶる、津田の若妻の、復讐の刃に刺されて斃れた。わが鷲山の殿におかせられては、世に珍しき貞女の志に對して、助力のお手を、お貸しなされたのだ」

さう、告げ終はつた時、侍どもの群は、おぼえず感動のぞめきをつくつた。

若妻の仇討！ と、聞いただけでも稀代の事に思はれるのに、あの色若衆が變装なら、疑ひもなく珍しい美貌の女に違ひない。遠くから見てもさへ慄とするやうな美しさだ。嬌やかな貞女！ 媚やかな烈婦！ いかにも是れは、大きな感動の起ることに、なんら不思議はなかつた。

愕きと狼狽とが、感動に變はつたといふだけで、場内には依然たる騒めきが續いた。

——で、垣見新六郎が、義龍の棧敷へ行つて、道三入道の口上を傳へたのは、稍暫らくしてからであつた。

義龍は、意外の面持で、

「ふむ。館は、お褒め言葉を、親くこの貞女へ、下さるといふのか」

と、苦わらひを洩らした。

「左様で御座ります。貞女の鑑だと、さう仰有るので御座りまして——知らぬこととは云へ、大それた悪黨を、武士の面汚しを、今日まで高祿で扶持せしことを、館おん自ら、お勝殿へ、お詫あそばしたいので御座りまする」

「その女を、すぐさま麓の館へ、連れて参れ。予も早速還るであらうぞ。さあ、女を伴へ」

「はア」

「こゝ神社の境内に、血の雨を降らせても止むを得んのだ。女を義龍の手から奪ひ去るのだ。千疊の館へ、この入道が伴れて戻るので。もし鷲山の奴原が騒ぎ立たば、容赦なく、押つ取巻いて、屍の山を築いてやれツ」

「それツツ」

と、道家孫八郎が下知した。

「はあツ」

近臣どもが、ばらばらツと棧敷から馳せおりました。

お勝は、呀つと驚きはしたが、しかし聲を立てゝは叫ばなかつた。

奇異な抑制力が、働いたのである。

ほんたうに奇異な心理が、現れた。自分ながら全で譯のわからない氣持に、支配された。

(おゝ！この身は……鷲山から稻葉山へ！)

さう、意識されつゝも、それが格別大したことでは無さうに、感じられた。

じつさいお勝は、異常な心地を経験したのであつた。もう彼女には、どんなことも怖ろしくなかつ

た。たゞ冷やかに目を睜つて、ちいつと四邊の態を眺めた。彼女の白い手と顔とに浴びた仇の血は、拭ひ除られてゐるが、若衆姿の衣服には、おなじ返り血が、どす黒く泌み込んだまゝだつた。

——その凄艶な様子を、

(なんとといふ美しさだらう！)

と、道三が思つた。

一方、義龍の棧敷では、

「や、あれ〜？あれ〜？」

と、訝つたのであるが、やがて、

(ちえゝ騙られた！)

氣が附いた時は既におそかつた。驚くべき入道の、辛辣な詭計！まんまと騙つた心算の此方が、しつべ返しに騙り返されたのであつた。義龍の棧敷は、見るまに、十數倍の人数の武士に包圍まれてしまつた。どんなに齒齧みをして、奪はれた女を、取戻すべき手段は、見つかりさうも無かつた。

(南無三寶！)

棧敷の板張が、義龍の力み足の下で、ぎい、ぎい鳴り揺らいだ。

「殿つー」

「わが君つー」

梅津玄旨齋と、小牧源太とが、たゞ空しく叫んだ。

「ひ、無念ぢやツー」

と、義龍は皆を吊上げて、女を——道三入道の館へと奪ひ去られてゆく女を、眺めつゝ、見送りつゝ喚いた。

七歳の辰王丸が、

「父上、どうしたのです？」

と、わきから義龍の高腿のあたりへ、しがみつく。人が殺されても血が溢れても、決して驚くな、と言ひ聞かされてゐたので、七郎左の左右田が刺された時は、怖くはあつたけれども其の怖さは覺悟してゐた豫期の恐ろしさだつたが、こんどは父の顔も、家來たちの顔も、眞青に變はつたのだから、むろん稚い少年の怯えたのは道理だつた。

(え、此子さへ居らずば！)

と、義龍は思つたし、小牧源太も、

(若君を、こんな場所へお連れになつたのが、大きな誤ちであつた。あゝ見す見す、お勝どのを、奪はれるのか！)

と、唇へ、齒を喰ひ入れて口惜しがるのであつたが、斯うなると、なによりも厄介な手足纏ひは若君、辰王丸だつた。

しかし諺にも、人とする龜は人にとらるゝと謂ふ。

人を謀れば人に謀られる。

道三を謀るために伴れて來た辰王丸——その辰王丸に累はされて行動が金縛りに束縛されてしまつたわけだ。

とは云へ、たとひ辰王丸がゐなくとも、義龍主従は、こゝでは刃が抜けなかつたらう。しかに力が山を抜くやうな義龍でも生き身の肉體が金鐵でない限り、力づくで女を取戻すことは、とても出来やう筈が無かつた。

(大悪黨の張本人だと、口ではあんなに言ひながら、あの入道を、甘く見くびつたのが俺の失錯……ちえ、魔がさしたのだ！ あゝそれにしても、お勝を奪つて、お勝をなんと？ 入道は、なんとする氣か？ 怎うする積なのだらう！)

義龍は、憤ると共に悔い、無念がると同時に疑ひ惑ふのであつた。

(俺への面當てに、あの女を殺すのかも知れぬ！)

さうも、思はれた。

ところが道三は、お勝を千疊臺の館へ伴れて還ると、直ぐに男装を捨てさせた。

女姿に、立ちかへらせたのである。

「黒髪の短いだけが、惜しいなう」

と、道三が云つた。

ほんたうに久し振りで装も女になつた時、にはかに熱い涙が、はらくとこぼれたお勝だつた。けれども涙は僅かの間に乾いて、ふたゝび冷たい無表情が戻つた。

(儘よ！ どうともなれ)

その夜のことであつたが、お勝は、道三入道の寢所へ召された。

「勝。——近う寄れ」

「はい」

「今宵から其方に、臥房の伽をさせるぞよ」

無爲四年

(一)

亂は、起りさうもないところに、倏忽として勃發することもあるし、また、必ず起りさうに見えてゐて、しかも中々起らない場合もある。

齋藤道三と、義龍との間などは、明らかに後者に屬する場合だ。

前にも云つたやうに、道三と義龍は、名こそ父子でも、實は宿敵だつたのである。父が子を斃すか、子が父を斃すか、その孰れかでなければならぬ間柄であつた。すなはち義龍からいへば、道三は、あかの他人だし、道三にしてみれば義龍は、身でも皮でも無いのだ。しごく不倫な、没義道そのものが、兩箇をむすびつけて、一方を父となし、一方を長男たらしめたに過ぎない。

すでに述べたことだが、もう一度こゝで繰返せば、美濃の主だつた土岐頼藝の愛妾三芳野が、道三に強淫された時には、懐胎つてゐた。頼藝の胤を腹に宿してゐたのである。腹の子は、三芳野が道三

の妻になつてから産まれた。それが義龍だ。土岐頼藝は、成上りの家來道三のために、二百年來の領國美濃と、愛妾と、其の腹の子とを、強奪されたわけだ。

ところが道三は、妻にした三芳野を虐殺してしまつたから、義龍にとつては、義父道三は、つまり母の讐だ。實父の頼藝は、生き甲斐のないやうな餘生を、大桑城に儻く保つてゐたので、母の讐と同時父の仇とは云へないにしても、土岐といふ家は、ほとんど滅びたも同然だから、家の仇には違ひなかつた。

して見ると、これで義龍が、道三に對して、もし復讐心を抱かないとしたら、それこそ餘程どうかしてゐた。

だが、理窟どほりに行かないのが、人の心だ。そこに、人間の行爲の錯雜さがある。——とは云つても、これは義龍の復讐心の炎が燃え盛らなかつたことを意味しない。義龍は固く誓つてゐた。

(仇敵、道三を、屠らずに措くものか)

土岐家再興の念願は、牢乎たる根を張つた。しかしながら、道三ひとりを斃し得れば、土岐家の再興が可能かといへば、決して、さうは行きさうに無かつた。

(亡き母の恨みを、霽らすだけでは！)
足りないのである。

道三ひとりを殺すことなら、さまで難事ではないだらう。いかに道三が驍勇でも、もはや、老境だし、道三に名槍の技の冴えが、なほ怎れほど残つてゐようとも、義龍にもまた、梅津玄旨齋祕傳の劍技があるばかりでなく、持ち前の臂力は、百貫の大石をも軽々と擧げる。

にも拘らず、義龍が、ためらつたのは、たとひ道三を斃し得ても、斃し得たものが又、忽ちに命を失はなければならぬと、さう思はれたからである。

(この俺が、命を失へば、誰が土岐家を昔に返すことが出来る?)

虎視耽々と、うかゞひながら、機會を掴めずに、空しく目を過ぎさねばならぬ義龍であつた。

で、お勝を、道三に横奪りされた時は、全身の血液が、のこらす頭へ逆流しかねないやうな有様になつて、

「もう斯うしては居れん！ 俺は戦ふぞ、闘ふぞ！」
と、叫んだ。

そして四尺八寸の大刀を、刀架から取つて、抜きはしなかつたが、鞘のまゝで、ぐる／＼ツと水車のやうに振り廻した。

刀と一緒に、自分の體をも、ぶん廻した。

眼が廻り眩むまで、ぶん廻した。

義龍の三十餘貫の重い體が、廻る獨樂のやうに回轉したのである。

この回轉は、美濃の動亂の序の口としては、まことに恰好な光景を呈した。

今にも、陣鐘が鳴りわたり、軍馬が嘶き、旗差物は稻葉山にむかつて進むだらうと思はれた。それくらゐ、義龍の怒り方は凄かつたし、家來ども、それは實に道理だと感じた。斯くなる上は、精かざり、命かざり、血戦し死闘して、屍骸で井之口の谷々を埋め、長良の川水を紅の血で染めてこそ、鷲山の郎黨だと、さう覺悟の臍を固めた。日頃の恩顧に報いるのは此時だ。かねて期したる義戦は今ぞ、死ねや死ね。と、勇み、逸る強者の數は、たしかに少くはなかつた。

ひろん蒼くなつて顛ひすくむ臆病者も、無いではなかつたけれど鷲山には、骨の硬い武士の方が、はるか多い。だから、まさしく干戈は動かうとした。が、小牧源太は、斷然止めたのであつた。

「まだく、早う御座ります」

すると、義龍も、

(時機尙早?)

と、自分で自分に訊いたのは、さすがに愚將ではなかつた。

義龍を、梟雄一途の人間と觀る見方は、するぶん誤つてゐるやうだ。我武者羅な、猪突一點張りの人物なら、五尺に近い大刀を水車みたいに室内で振り廻し、自分の體も獨樂みたいに、目くるめくまで、ぶん廻した直ぐ後で、よしんば諫められたにしても、旗上げの時機が、熟したか熟さないかを、考へてみるなどといふことは、とても出来るものではなからう。

(早過ぎることに、變はりはないのだ。しかし)

と、義龍が思案した時、

「殿！ お怒りはさることながら、お勝どのが、稻葉山に奪はれました今度の事件は、決して御旗上げの時機を、さまでに促すべきものでは御座りませぬぞ」

小牧源太は、さう諫言をつづけた。

「うむ、能くも云つて呉れた」

頭へ逆流した血液が、驕然と流れ下つた。見かけによらぬ深謀熟慮の義龍が、そこに戻つてゐた。いくたびも頷きつゝ、

「さうだ！ 其方の申す通りだ」

「おゝ然らば！ やはり尾張の内亂を、お待ちなされますか」

「待たう。待たなければ駄目ぢやー」

「そのお言葉、玄旨齋殿も承はらば、さぞ満足に存じ上げませう」

「玄旨齋こそは、得がたい兵法家だ。剣術の精妙と、謀略の幽玄、機微の域とに兼ね至るといふべき達人ぢやてなう。今更ほめるのも異なるものだが、稻葉山を攻め落すためには、あの達人の申すことに萬事従ふはかあるまい。我慢袋をあぶなく破りかけたこの義龍、今後は、きつと憤まうぞ」

玄旨齋は、つね／＼、尾張の内訌の破裂して、織田の兄弟、同族が討つか討たるゝまで血を流し合ふ時を待て、待たずば稻葉山に勝つことは出来ない、さう義龍に訓へてゐた。

義龍は、お勝を奪はれた憤りをつひに抑へた。抑へ難い悲憤を、まったく努力を竭して抑へつけた。そして織田の内訌の起るのを待った。

だが、織田には内亂が、これもまた、起りさうでゐて中々、容易には起らなかつた。

(あゝ待ち遠い！)

義龍は、四年といふ長い月日を待ちくたびれることになつたのである。

(三)

何が、尾張の内亂を、四年も遅らせたか。

何が、血で血を洗ふ兄弟喧嘩の聞きあひを當然おこつてもいゝ筈の、天文十八年の秋冬の頃から、

かぞへるならば丸四年後の天文二十三年——いや弘治以後まで遅延させたか。

「じれつたいなう権六」

「いそがば廻れと申しますぞ」

「ふん、一つ夫れだ」

「え？ 一つそれとは？」

「一つことを、同じ事を、さう十八番にしては穢が生えるよ」

「武藏様。いそぐ鼠は、雨に逢ひまする」

附家老柴田権六は、勘十郎信行を、「殿」とも呼んだが、「武藏様」とも呼びかけた。勘十郎は武藏守と稱してゐたのだ。

「だが権六、斯うしてゐては石龜の地駄ん太ではないか」

「殿は、太田道灌を御存じか？」

「なに太田道灌？ 七十年前前に死んだ人物が、怎うしたといふのだ？」

「道灌の和歌のことで御座りますよ」

「山吹の歌か、みのひとつだに無きぞ悲しきだらう」

「はッはッは違ひまする」

「なにを笑ふ？」

「それは山吹の里の、娘の詠んだ歌で御座りまして、道灌の歌ではない」

「権六、柄にも無い風流詮議は罷ぬい」

「みの一つも、雨が因の歌では御座りますが、道灌自身の歌に『急がずば濡れざらましを旅人の、後より霽るゝ野路の村雨』といふのが御座りまする」

「うふツふ急がずばか。いやに廻りくどい諫め方をしたものだ」

「待てば海路の日和あり」

「止せ」

「止ませぬ、お解りになるまでは」

「執こいな」

「はい、飽くまでも」

「仕様が無いの、——なら予も知つてゐるぞ、待てば甘露の日和かなだ」

「それ夫れ、結構で御座りまする、わはッはッは！」

「此奴め！ 人の痺れを娛しきうに……」

「いゝえ自分の痺れをも娛しみまする。拙者は熟柿主義で御座る」

「権六は近頃、いろんな言葉を仕入れたなう」

「退屈凌ぎに仕入れましたぞよ」

「だが熟し柿は、ほんとうに、ひとりでに落ちるか知ら？」

「落ちますとも」

「枝を、揺すぶらすにもか？」

勘十郎信行は、さう云つて権六の顔を見つめた。

信行は、すでに犬山の信清の妹、姫を娶つて、今年天文二十三年は齡二十。——早熟老成の素質が

十四五歳の頃から人を驚かせたほどだから、今や二十歳で普通の三十にも見えてゐた。

「揺すぶつては、悪いといふのか？」

「悪う御座ります。人心を離反させまする」

「予は、さうばかりとも思はれぬが……」

「ほ、これは御思慮ぶかい殿の、御分別のやうでもない。おん見殺しの悪名をおとりになつては、御

還が塞がりまする」

と、權六が答へた。

さう云はれては、理の當然だから信行も、強ひて言ひ張れなかつた。

「やはり熟柿主義かなう！」

權六の同意なしには、怎うにも出来ない。

柴田權六勝家は、年と共に、その有能さを増し加へてゐたのであつた。

(四)

末森の城を背負つて立つやうな權六が、こんな具合では、勘十郎も手が出ない。だから、無爲に暮すはか無かつた。

美濃では義龍が、尾張の亂れを待つてゐたのに、尾張は尾張で、勘十郎が、姉婿でもあり妻の兄でもある犬山の信清と、腹を通はせ、また清洲事變以來一層したしくなつた彦五郎信友とも、こつそり氣脈を揃へて、たゞひたすらに美濃に戦争の起ることばかりを、のぞみ待つてゐるのだつた。

犬山の信清は、

「美濃に戦が起れば、かならず義龍が勝つだらう」

と、云つたし、清洲の信友も、自分が舊主の義統を殺して、斯波武衛家をほろぼしたことなどは、棚に上げて、

「義龍が旗上げをすれば、それは義戦だ。舊主土岐家を滅ぼした道三は、正義名分といふものを敵にしなければならん。だから實力は五角でも、戦ふとなると非常に不利だ。きつと敗ける。義龍は、道三を仕留めるだらう。道三を屠らば、餘勢を驅つて尾張へ侵入して、戦を古渡へ向けるにちがひないのだ。われ／＼は、それを待つてばいゝ」

さう、云つたものだ。

たがひに待ちつ待たれつで四年を、空費した形だつたが、この間に信長は、なにをしてゐたらう？もし訊かれるなら、何も爲なかつた、と答へても決して、間違ひでは無ささうだ。

はたから眺める限りでは、これこそ本當に無爲であつた。

「あれこそ極樂とんぼよ！」

「うむ！ 極樂とんぼは金的だ」

「一點微塵も、苦勞といふものがおあんなさらぬのだ」

「奇て烈ちやてなう！」

「不思議立てられんて！ 通り越した」

「まったく奇ッ怪こん／＼ちやよ」

「はッはッは、そんなら矢つ張り狐々馬の方が、圖星ぢやないか」

「わふッふッふ、折角の極樂蜻蛉が金的でなくなつては、考へついた奴に、ちつとばかり氣の毒みた
いだ」

「むゝ氣の毒とも！ どうでも極樂蜻蛉だよ。極樂とんぼに留めを刺す。だれが何といつても極樂と
んぼだ！」

「おれは狐々馬だ！」

「おれは極樂とんぼだ！」

「間抜け奴い、貴様が極樂とんぼかい？ 極樂とんぼは殿の御ことだ」

「なにを抜かすのだ。極樂とんぼの證據には、殿様は一かう年をお取んなさらんぞ。見るがいゝや、
何年経つても吉法師様の、無邪氣なお面さまが、抜けんではないか」

「抜け！ 狐ちき様だつて歳は取らんぞ」

「止せやい！ とんぼ狐ちき五分と五分だ」

「ちがふ。四分六だ」

「七分三分だ」

主君信長への評價定めは、ざつとこんな風であつた。

ごく少數の昵近者をのぞけば、古渡の家來どもは相變らず、彼等の主の眞價を、その片鱗さへも認
めることが出來ずにゐた。

これは然し、あたりまへだつたらう。依然、信長が相も變はらぬ信長であつたのだから、家來ども
の評價の方も、どう相變はつてみようと無かつた。十五六歳當時の信長は、すでに立派に大人備た體
格をもつた悪戯童であつたが、いま二十一歳になつても、大人のやうな少年が、少年のやうな大人に
變はつたに過ぎなかつた。つまり外貌は殆ど變化しなかつたのである。

(五)

(……？？)

濃姫は、枕に觸れてゐない方の頬に、壓力を感じた。

(指！)

濃姫には、指が感覺された。

壓力は、その指先から生じたものだと思つると、

「おやもう朝……で御座いませうか？」

さう、云つた積だつたが、まだ夢現の境目で、たゞ唇を、ほんの少許うごかしたのみであつた。だが熟睡からは揺りさまされてゐた。

耳が、夫の言葉を聞きわけた。

「そなた廁へ行かんか？」

「あら？」

閨の蘭燈の光のなかで、ほのぼのと美しい顔が、薄目を開いた。

「行きたくはないか？」

「お憚りへ、で御座いますか？」

「さうだよ」

「まあ何故そんなこと仰有いますの？」

「何故も斯故もあるものかよ、行きたうはないかと訊いたのだ」

「あアら、おつまらないことを」

「はて、詰まるものだがなう」

「……何がで御座いますか？」

「其方みたいに健康な女は、ぐつすり眠つて目が覺めた時は、たいがい弾むくらの詰まつてゐるものだよ」

「あれ！ なに仰有るかと思へば、ほんたうに、おつまらないことを」

「なアに詰まらなくは無いよ。消化、排便といふやつは、とても大切な生活機能だ。な、其方さうは思はんのか？」

「もう私は存じませぬ」

濃姫は、顔を夫から反けて、體を夜具のなかで仰臥に寝變へた。

「ほう薄暗い天井と睨めツこか」

信長は、自分も仰向きになつて双方の腕を枕の兩側へ伸ばすと共に、兩足を、なにか蹴るやうに突張つた。そして思ふ存分に全身の筋肉を、いはゆる丈延びの形で引きのべた。

「排泄機能は、いはゞ健康の母だぞよ」

「まだお止しにならないので御座いますの？」

「止すものか。これからだ」

「まあお意地わるな！」

「濃姫、そなたのやうな産まず女は、なほさら健康が大切だよ、人一倍排泄を、重んじなくてはなら

んのだ」

「貴方！」

産ます女と云はれたことが、びーんと胸に應へた。濃姫は、急に、うら淋しくなつた。悲しくなつて来た。

「なんだい」

「もうたんと、お嬬りあそばせ！」

「嬬れ？ おれは大真面目の、屎まじめだ。敢て、排便の話だから糞まじめだといふ洒落ではないよ」
夫が、ほゝゑめば微笑むほど、妻の心は曇つた。

たしかに濃姫は、産ます女かも知れなかつた。結婚後、はや七年目が秋酬なのである。

——稻葉山から興入れしたのは十八歳の春であつたが、三つ年下の、當時十五の夫信長は廿一歳だから、濃姫はちやうど女房盛り、産み盛りの廿四歳だ。にも拘らず、今以て、姪む氣配のないのだ。しかし、産ます女と云はれるのが、げんざいの濃姫には、何よりも辛かつた。

「もし！ 私は、どうかして御胤を宿したいと、寝ても覺めても、そればかりを、願つてゐるので御座いますものを！」

夫へ、向け直した顔に、涙が光つた。

(六)

なにも今初めて云はれる「産ます女」ではなかつた。それは時々、信長が口に出す言葉だつた。濃姫としては、至ごく聞き慣れた名詞にすぎないのだが、妙に今曉は、耳の底に、それが痛く響き、胸の奥に、それが深く刺さつた。

「だめだよ濃姫。いくら焦つて精出しても、無いものは出来ないぞよ。諦めろ」

「無いもの……とは、お子種がで御座いませうか？」

「いや、子種の無い男も、廣い世の中には、無くは無からうし、病や不攝生のために、持つた子種も絶やす者も有らう。だが、予に子種が、無い譯がないよ」

「わたくしは和子が欲しい御座います。産みたく御座います」

「解らん女だな。授からぬ女は、産めないといふのだ」

「そんなら、私だけの所爲だと、仰有いますの」

濃姫の眼から、涙の露が枕へ、こぼれて落ちた。

「そなたの所爲とも。昔から、婚姻して三箇月以内に姪まぬ女は、およそ三年は身ごもらん。また四

「筒年以内に身ごもらぬ女は、およそ一生涯、妊むこと無し、といふ俗説があるよ」

信長は、どこで聞いたか、讀んだか——そんなことを云つた。

「あら、そんなこと申しますか知らず？」

「云ふとも。各務野でも知つてゐようぞ」

「でも、十年も、その餘も連れ添つてから初兒を、産む女も御座いまするものを！」

「それは例外だよ」

「私も、その例外とやらに、肖らせて頂きまする」

「とても、肖れさうに無いな」

「なぜで御座いますえう？」

「生得の、島ちがひだもの」

「島ちがひ？ と申しますと？」

「母婦に、婦婦——と云ふのを其方、知つてゐるか？」

「いゝえ存じません、ぼふにふゝなどゝ、そんなこと……」

「母婦は、母の婦と書くのだ」

「あら母婦なら、存じてをりますわ」

「婦婦は、婦々と重ねる」

「あアら？ 女を重ねるので、御座いますか？」

「夫婦の婦の字を、二つだ。解つたな？」

「文字はわかりましたけれど、婦々なんて言葉、それこそ御座いませぬぞえ」

「無くて、つくれれば有る」

「あれ随分お自分勝手な！」

「勝手なものか、それそこに其方といふ婦々がある。だから、言葉も必要だ。必要だから、子が作つたのだ。つまり産ます女の別名だよ。母婦とは島ちがひさ。母婦の島は、子を産むやうに出来てゐるが、それが婦々となると、子種が停まらん。流通が、佳すぎるのだ。むろん母となる資格は、ありつこ無いが、その代り、妻たる資格は、あり過ぎるくらゐだ」

信長は、手を伸ばして、妻の涙を拭き取つてやりつゝ、

「これさ、いゝ歳をして、泣くことはなからうに」

「でも、お子種が、とまらぬやうなこの肉體を、敷かずにはをられませうか？ わたくしは、情け無う御座いまするものを」

「そなたは欲しからう。其方の心は子を産みたからう。だが、其方の軀は産みながらなのだ」

さう云つて、信長は、こたはり無げに笑ふのであつた。

(七)

「だが、それで宜いのだ」

と、信長が云つた時、しなやかな手さきは、信長の掌を靜かに拂ひのけた。白い腕には、むつちりと脂肪が展つてゐた。柔かな皮膚には、羽二重のやうな滑らかさと共に、どことなく吸ひつくやうな感觸があつた。濃姫の持つ魅力の、大きな要素の一つは、この鵜肌の宜さであつたらう。だから信長も今、頬から押しつけられた手掌を、濃姫の腕へ持つて行つて撫でた。鵜肌の手觸りを娛しんだのである。

「結構だよ。予はこれで満足なのだ」

「あら揆つたう御座います」

「現在の予には、まだ子供は要らんのだ。もちろん、もつと歳をとれば、しぜんと兒女の必要も感じよう。是非ほしくもなるだらう。が、今ふんでは、そなたといふ妻さへあれば、充分なのだ。たつた今直ぐにも、子が欲しければ、造れる側女を持つてばいゝのだ。他の女を可愛がりさへすれば、子ども

ぐらゐ、なんの造作もなく造れるよ。それをだ、拵へないのは、こゝ當分は欲しくないからだ。子どもを拵へるよりも、自分といふものを拵へなければならんと思ふのだ。で、子どもを産ませるためには、他の女が無くてはならんけれど、自分を拵へあげるには、其方ひとりあれば、女は十二分といふ氣味だ。——な。その意味では、申分ない妻だよ。半割一點、非の打ちどころの無い奥様でいらつしやる」

「なんとでも、被仰いましー」

「そこで話を、前へ戻すと、剛だが、どうなのだ？」

「え？ どうなとは？」

「なにも、怵へるには及ばぬことだ。行つて來るがいゝ」

「あゝらー！」

「序に空模様を、のぞいて來て呉れ。どうやら長時雨が晴れたらしいから」

さう云はれたので、濃姫は少時、耳をすまして、

「晴れたやうで御座いますのね」

「東雲に、棚雲が明るく見えれば、天氣恢復だよ。日の出次第に拭つたやうな秋日和にならうから、今日は起抜けに、朝飯ぬきで出掛ける」

「ではあの、お天気模様が悪ければ？」

「悪ければ、またとつぷりと寝直すまでよ」

「そしてお天気がよろしかつたら、どちらへお出掛けなさいますの？」

「馬と體を、責めるのだ」

と、信長が答へた。

「そんなら見て参りまする」

濃姫の萌たい姿が、懸け衾の横の方から、すべり出た。媚めかしい態が立つた。

「おひと言、見て来いと、被仰れば済むことを！」

さう、呟くのを、

「なに、予が冗口を叩いたといふのか？」

と、信長が聞き咎めた。

濃姫は、屏風をめくりつゝ、

「いゝえ、お冗口だとは申しませぬ」

返辭をして襖を披けると、冷え冷えとした曉の霧が、葎の微かな隙間から縁側へ、はいつて來るのが感じられた。

「まあ大層な霧！」

臥褥では、信長が、

(信光叔父に會つて見よう)

と、思つた。

信光は、信長の亡父の弟で、守山の城主だった。

(あの叔父なら、多分やれるだらう)

(一)

「意氣地なしツ、續けつー」

信長は、聲を勵ましつゝ、騷鹿毛の荒若駒を躍らせて、扈從どもの馬を、うしろから、ぐんぐんと見る見る間に追ひ抜き、馳せ抜いて行つた。

騷鹿毛は、たちまち先頭に立つた。

地べたが、路が、草が、秋草が、土が、土煙りが、この駿馬の蹄の下を走り流れるかと擬ふほどの速さだ。

信長の上半身は、びつたりと駿馬の鬣に密着してゐた。信長の足は、ひろん鑿を踏んではゐたけれども、尻は明らかに鞍から離れてゐるのだ。だから腰は馬背の鞍上に据わつてゐるのではなくて、謂はば馬の頸に跨つたも同様な信長だつた。

信長こそは、希有な騎手であつた。

天賦天成な巧者でもあつたし、また殆ど比類ないくらの練磨した爲の達者でもあつたのが、信長の馬術だ。

荒若駒の騷鹿毛は、まるで矢のやうに守山驛に着した。

これは實に第二十回目の到着だつた。

まだ薄暗かつた朝まだきから、すでに七時間、古渡の大手馬場とこゝ守山驛のあひだを、これで丁度十九回半、往復したのである。信長は自身の騷鹿毛を十九回往復させたのみならず、扈從らを騎せた馬どもにも、おなじく十九回往つたり來たりさせたわけだ。いふまでもなく馳驅けぐるのでは、七時間に此の距離を往復十九回出來よう筈がない。どの馬も、すべて全速力で疾驅した。いや、疾驅させられたのだ。

扈從たちは、未明に叩き起され、顔も洗はず、朝飯も食べずに、たゞ馬に飛び乗らねばならなかつた。そして、滅茶々に鞭を揮はなくてはならなかつた。人間も面喰つたが、馬もいゝ災難だつた。

朝の飼葉もあてがはれずに、無やみ矢鱈に尻をヒツぱたかれて、守山驛までの同じ路を、なんべんも何遍もきり無しに走らなければならなかつたから、遣りきれない。いくら汗を垂れ流しても、泡を白く吹き出しても、ちつとも容赦なしにヒツぱたかれた。

駄馬であつたら、乗り潰されたらう。

——脚を挫くか、横ッ倒しに仆れるか、したに相違ないのであつたが、さすがに！
駿足ぞろひ。

信長昵近の小姓、近侍たちの騎る馬だけに、いづれも遅しかつた。

だん／＼に速度は鈍り、はげしく疲れ喘ぎはしたものの、つひに一頭も乗り潰されずに、往復十九回の疾駆を完了して、いまや將に第二十回目の往路を、走り終らうとしてゐた。

で、信長は、騏鹿毛を今回もまた第一着に、遙か他の馬どもを抜いて、先着させるが早いか、馬首を回らして、

「遅いぞラー」

と呶鳴つた。

その聲の、なんと大きかつたことよ。

聲量の幅といひ、強さといひ、これが朝飯をとらずに、全速力の馬の上で七時間、揺られ通した人の聲であらうとは！

「勝三郎つー」

と、信長は、だが賞めるやうに叫んだ。



顔を青くした勝三郎が、馬を駈に騎りつけた。

「新助三着つ！」

と、毛利新助は、自分でさう叫びつゝ、馬をつけた。これも、第二着の勝三郎と同じくらゐに青ざめてゐた。

第四着は、前田犬千代だつた。

そして、第五着は、服部小平太。

(二)

六着以下は、するぶん遅れた。

みんな蒼白な顔色になつてゐた。青褪顔といふだけでなしに、今にも一命が絶えなんとするかのやうな、なさけない風情、氣の毒な恰好のものが、すくなからず見えた。

「だらしが無いな、はッはッは！」

と、信長は笑つて、

「しつかりしろ。もう一駈けで二十回だぞッ」

嗚呼つたが、扈從どもの大半は、我慢も張りも竭き果てゝゐた。

なかんづく、山椒小姓の大次郎などは、もはや死人面になつて、馬の頸の根っこへ、しがみつき、頬べたを鬘たてがみに小擦りつけるのが、精かぎり。この上ひと揺り揺られたら最後、落馬してそのまゝ息いきされさうな有様なのであつた。

前田犬千代が、苦しさうな聲音で、

「わが君つ、御無理で御座りませうぞッ」

と、叫んだ。

「なにが、ませうだ？」

「戦よりも苦しう御座ります」

「馬鹿野郎、戦をした覚えも無いくせに」

信長が、さう云ふと、毛利新助が、

「いや確かに、敵と闘ふよりも、なんぼ辛いかわりませぬぞよ」

と、抗辯した。新助は數たび烈しい戦場を往來して、剛敵の首をいくつも取つた勇士だつた。それに引きかへて信長は、たつた一度初陣に、闘ひを遠くから眺めたといふ經驗しか無かつたけれど、それしきの事で凹むやうな心臓の弱さなら、たれも持てあましはしない。

「わはッは、新助の頓痴氣め。當り前すぎたことを申すなよ」

信長は、左手の手綱をぐいと引いて、乗馬鹿鹿毛の鼻づらを、新助の馬の耳のあたりへ、いきなり押しつけたので、押しつけられた方の馬は愕いて、鼻を鳴らした。

「殿……」

「新助、おまへたちの出た戦なんぞは、野良試合に刃物でチョツびりと、毛を生やかしたみたいのものだ。そんな遊山の狂言じみた戦よりも樂な真似を、おれは態々やらせはせん」

「我君ッ」

と、池田勝三郎が、鞭を握つた手の人差指で、自分の喉を突ツついて、

「乾ツつきさうで御座りますよ。それに——」

と、こんどは腹を押へて、

「空ッ腹では、なんぶんにも、氣力が失せて眼が眩みます。もう——只今の一驅で、皆の者が怏へ性、一ばいで御座りませうゆるゑ、どうぞ是れ限りで、後は御容赦下さいますやう！」

さう、訴へたのである。

扈從一同に代つて歎願したのだ。

「弱蟲ばかり揃つてゐる」

と、信長が微笑した。

「勝三郎同様、この犬千代からもお願い申上げます」

「新助めも、おなじくお願い仕る」

はつきり口の利ける者は、勝三郎、犬千代、新助、小平太くらゐに過ぎない。

「ふゝふツム仰山な野郎どもだ。飲まず食はずも、わづか半日でしか無いのに」

信長は、手綱をひいて、鹿鹿毛を喉の境の上に登らせた。

「おれは丸一日や二日は、平氣だぞ」

「わが君だけは、人間放れがしてゐらつしやる！」

さう叫んだのは、服部小平太であつた。

「わはッはッは、獸に近いと云ひたいのだらう」

さも可笑しさうに、信長は驅を揺すつた。

(三)

「と、と、とんでも無い！ 獸は既う斃れさうに、渴をおぼえてをります。これ此通り、どの馬も」

「ア〜と、堪へがたげに喘いでをりまするぞ」

小平太が堤の上を仰いで云ふと、

「殿！馬どもが可哀想では御座りませぬか？」

と、犬千代が言葉を合はせた。

「ふ〜成程。馬どもは、稍よ可哀想だな。……たしかに、走つたのは其方らではなくて、馬だ。――

馬に、水を吞ますとしよう」

信長は、靡鹿毛を、堤の東へ下りて行かせた。

堤の東には、一すぢの細い水流があつた。それは、尾張の下四郡を、河東と河西とにわける小多井

川の、支流の一つだつた。

秋雨の長降りが、やつと今朝晴れたばかりであるから、浅い水底さへも、よく見えないくらゐ濁つ

てゐた。しかし馬が飲むぶんには差支へのあらう筈が無い。

水を見た馬どもは、にはかに元氣づいて嘶いた。嘶きつゝ、その浅い流の中へ這入つて行つて、脚

を浸けると同時に口を、水に當てがつて、貪り呑んだのである。

だが、馬の背の人は、ほとんど一齊に顔を擧めた。

（あゝ馬になりたい！）

（泥水でもいゝ、一口飲みたい！）

中には、鞍から下りおりて、馬と一緒に、鼻を水に浸してがぶがぶと、その泥水を飲まうかと思

ふものも、無いでは無かつた。

けれども、そんな事をしたら、どんなに叱られるだらうと考へると、怖い方が先に立つた。

水飼はれる馬の鞍の上で、騎士は灼けるやうな渴きを、一きは激しく感じて、舌で唇を舐めたが、

てんで唾液が出てこない。

（こりや焦熱地獄の苦患だ！）

さう思つた時だつた。――人々は、突如！主君信長の聲を耳にした。

「中務の爺つー」

扈從たちは、いづれも、はつと膽を叩かれたやうに感じたのだつた。

さつきからの沈黙を破つて、信長は叫んだ――

「政秀！すでもう六年経つた。草葉の蔭で、おことも無、咽喉が乾くだらう。さあ、おれが今、

水を飲ませてやるぞー」

扈從たちは、増々、愕然として顔を、ぎこち無く見交した。一時は焦熱地獄も何もかも、すべて忘

れて、目を皿にした。

血にした眼に映つたのは、あきらかに狂的に見える舉動だつた。

——信長は、今、水を飲ませてやると、叫びながら騾鹿毛を、川の流れの上の方へ向けて、まつしぐらに馳せのぼらすやうに、手綱を使ひ、鞭を打つたのである。

あゝ、なんとといふ異な所業よ！

騾鹿毛は、川の中を、水の中を、蹴立てる脚で水煙りを、前後左右に繁吹かせて走るではないか。しかも、しかも！

馬上の信長は、

「おれの馬の蹄が、とばし散らす、この水を、爺よ、中務の爺よ。飲め！飲め！飲んで呉れつー」

と、自分の體をびつしよりと、水煙に濡らしつゝ、高らかに喚はるではないか。

だが、心のなかでは、
(尾張の醜草刈りも、近づいたぞー)
と、さう叫んだのであつた。

(四)

信長は、やがて水の中から馬を、岸へ、をどり上がらせた。

小川の畔には、柿の木が並んでゐた。どの木にも、赤黄いろく滑々と良く熟した果實が、枝も撓むに實つてゐるのを、信長は見あげた。

(美味さうな)

腹は、へとくである。喉も、食道も、胃ぶくろの内も、かさかさに乾きからびてゐることに論は無。平氣だといつたのは、誇張の瘦我慢だ。旺盛な食欲と、切迫の渴望とが、たちまち勃然と起つたのである。

柿は、甘くて水氣たつふりの五所柿だつた。白茶けた葉は大方ちり落ちて、枝には紅い實だけ止まつた柿紅葉。それは、秋日和の最も美しい風情のひとつなのであるが、愛で眺める氣持とは、およそ遠い信長のいまの心持からすれば、たゞ食ふための、また食はれるための物でしか無かつた。

馬上の信長は、手を伸べて、大ききさうなのを一箇、枝から、もぎ取つた。

紅光澤うるはしい五所柿は、すぐと口に持つて行かれた。ぱつくり開かれた大口が、それを嚙んだ。果肉の約三分の一が、皮ぐるみ、種ぐるみ、口の中に嚙みとられた。果汁が、喉を心地よく潤す。

(うウ甘い！)

舌が働いて、種を唇の外へ吐き出した。信長は、モクもくと咀嚼したのを嚙下した。そして食ひ

さしの柿を、ふたゝび口へ持つて行きかけた手を、ふいつと停めて、

(さうだ！ 爺に食はさう)

俄然——その柿を、天に向かつて投げ打たうとするやうな姿勢をとつた。

「爺よ！ 中務よ、これを喰らへー」

信長は、あらん限りの力で、この食ひかけの五所柿を、青い中空を目がけて、擲り投げた。で、投げてしまふと、ぐるりと驪鹿毛の首を、扨従どもの方へ引きめぐらして、

「おうい、皆の者つ」

と、嗚鳴つた。

勝三郎や犬千代らが應答ふと、

「柿を食はんか、柿を——うまい五所柿だぞラー」

信長は、大きな聲で招いた。

撓わに熟した柿は、やがて扨従どもの喉の渴きと、空ツばらの餓じさと、昏倒しさうな疲勞とを救つて呉れた。

「喰らへ、喰らへ！」

と、自分でも頻りに食ひながら、信長は叫んだし、扨従どもは思ふ存分に食ひ喰つたのである。

「大次郎の奴は、形は小びでも食ふことだけは、一人前だな」

「恐れ入りまする」

「やつと人心地を取戻せたと見えて、音が出るな」

「恐れ入りまする」

「おれに恐れ入るよりも、命の親の柿に恐れ入れ。向後は柿の木の下を通る時は、きつと御辭儀をして通れよ」

「はい」

「忘れたら、ひツばたくぞ」

「はい、忘れませぬ」

「む、覚えてゐろ」

信長は、口の先では、そんなふうにな念を押しながら、

(來年の四月、爺の七回忌までには……)

と、何事かの、考へごとをしてゐた。

それから半响ほど後——

守山の城は、信長を迎へ入れた。

本丸の表書院で、城主の信光は、甥である信長と相對した。

(五)

通稱を孫三郎といった此の信光は、長兄の故信秀とは年齢が、十以上も違つてゐたし、その長兄よりも三年ほど前に病死した次兄、すなはち、犬山の信清の父とも九つ違ひの弟だつた。だから、現にまだ四十歳へは大分間のある壯年の、血氣盛りといふわけだが、實際の容貌は、非常に老け、やつれてゐた。四十七八とも見られたし、すでに五十の坂を越したと云つても、或ひは頷けたであらう。なにが彼を、そんなに老けさせたか、といふと、病魔のためであつた。

青年時代に罹つた胸の病が、固疾となつたのだ。怖るべき癆咳——それは無残にも、彼の若さを蝕み塌してしまつた。肺癆の症がおほくの場合、命とりの難病であることは、昔も今に變りはないのであるが、信光は不幸中の倖ひ命一つは取止めたものゝ、骨と皮ばかりに衰弱した肉體は、長い間歩行をさへ困難にした。ほんの息があるだけの信光は、病室に閉ぢこもつたきりで一切外出を避けた。で、長兄の信秀が、愛妾岩室の閨で頓死をとげた時にも行けなかつたし、その葬式にも列なることが出来なかつた。

ところが、それほどの重態が、その後は、意外にも減切りと治つてきた。俗にいふ、固まつたのである。

守山城の家來どもは、ほつと愁ひの眉を開いた。城主信光の瘦軀が、宛然老いた鶴のやうに痛ましく見えることは、相變らずだつたけれども、一時は白蠟のやうになつた膚色は、やゝ黒茶いろの色素を加へ、目の色も、氣力も、もはや病人ではなくなつた。そして勿論歩行にも、外出にも何等差支へない程度まで、體に健康が戻つた。

さて——さうなると一勢力だ。

末森の勘十郎、清洲の彦五郎、犬山の信清といふ聯盟が、この勢力を餘所に見る筈がない。もし若い頃からの病弱といふ妨げが無くば、もつと大きな力を持ち得たにちがひない守山だつたらう。なぜかなら、信清の父は、この信光の兄とは云ひながら、犬山家へ婿養子になつた身だから、たとひ今存命してゐたにもせよ、信長に對しては、おなじく叔父でも押しか利かぬわけだ。つまり、信光は、信長の唯一人の叔父なのであるから、よしんば現在の實力からいへば知れたものでも、その信光を、反信長の徒黨に引き入れると否とでは、大層な相違が生ずる。

そこで、反信長の側では、拔目なく信光を誘つてゐた。それを、知るや知らずや信長は、まつたく今日といふ今日まで、

(自分にそんな叔父が、あつたか知ら?)

と、云はぬばかりの顔で過してきたやうに、傍からは思はれてゐたが、怎うした氣まぐれか、ひよつこり訪れたのだつた。いや然し氣まぐれの風の吹き廻しと見えたのは、たゞさう見えたまでのこと、信長には何か思ふ仔細があつたらしい、といふのは、

(あの叔父なら、やれるだらう)

と、さう心に呟いて、さうして出向いて來ての訪問だつたので、決して偶然や、出鱈目な出來心させた對面ではなかつた。

「叔父御は、松葉を喰ふといふ仙人の風半が、おあんなさる」と、信長が云つた。

「これはまた……」

信光は、寂然と微笑んで、

「枯らびてゐますのは、外觀だけぢや。かう見えても、心のうちはお羞かしいほど、浮世じみた煩惱の俗人で御座るよ」と、答へた。

(六)

「成程。——すると叔父御は、松葉食では、物足りんと見える」

信長は、一倍とぼけたやうな顔をした。

「はッは、なんぼ何でも松葉食は、ちと可哀相すぎはしませぬか?」

叔父の辭柄は丁寧だつた。甥は甥でも、亡き兄の總領で、すでに家督した以上、信長は當主の殿だから、叔父は決して目上とはいへないのである。

「左様か知ら?」

「左様でござるよ」

「屹度でござらうか?」

信長は、はなはだ恐にもつかぬやうな念の押し方をした。だが、叔父は毫も怒る氣ぶりが無い。「屹度、相違なしで御座る」

にこやかに答へたので、信長は、
(會ひに來て、宜かつた)

と、思った。

「叔父御。お身様に訊ねたい儀が、二箇條あつて罷り越した」

「ほう！ 二箇條などと、改まつて？」

信光は猶、笑顔を消さずに聞き返したが、今朝まだ明けきらぬ味爽から、古渡とこの城下の騒の間に、際限もなしに馬をとばせて、馬鹿御苦勞とでもいひたいやうな往復をしてゐる人々が、誰であるかといふことは、むろん信光に知れない筈がなかつたから、さうした舉動を敢てした揚句の信光が、今こゝで聞き直つた文言めく「二箇條の儀」は、どう考へてみたところで、とてつも無くちぐはぐだと、さう思ふほか信光には、思ひ様も考へ様も有り様がなかつた。

「左様。信長は改まつて申す」

「おゝそれは〜」

「松葉食がお好きなら申さずに還る積りで御座つたが、ほんたうにお嫌ひとあらば、お訊き致さう」
「どうぞ！」

「お身様に、河東二郡を進ぜようと思ふのだが、御所望か否か？ それを受けて貰へるか怎うか？ すなはち質問の第一箇條は、これで御座る」

「なんと仰せる？ 河東二郡は、末森の所領では御座らぬか」

「今分はな」

「それを、身共に？」

叔父は、たちまち事の重大さを感じた。

書院は、先刻から人拂ひだつた。差し對ひの二人きりであつた。

「御所望なら、いづれ其のうちに進ぜよう。但しお身様にそれを受ける心がおありならば、或る期

間、お住ひを此城から、清洲の南櫓へ移されい」

「えゝつ？ 清洲の、南櫓へ身どもの住ひを？」

あまりにも意外な提案だつた。

「お移しなさい」

信長は、斷乎として命するやうに云つた。

そして、この叔父になら、自分の心持は解るだらうと思つた。——さう思ふ氣持が、はつきりと眼に、瞳の光に表れた。

その目の色は、果然、叔父信光に読み取られた。期待に反かなかつたのである。

(説明を要さぬであらう！)

(よく會得できた。清洲へ参らう！)

かゝやく腫と腫が、さう物を云つたのだ。
ふたりは無言で語り合つた。頷き合つた。

「だが然し、第二の御質問は何で御座らう？」
と、信光叔父が訊ねた。

すると信長の表情が、にはかに探つたさうに、揺らぎつゝ緩んだ。

「第二箇條でござるか……」

信長の眼の色には、たしかに不思議な變化が起つた。

(七)

(訝や訝や！)

いぶかしいと信光が感じた時、

「これは少し申しにくいことだが——」

と、信長が、なぜか信長らしくもなく、云ひ濁んだので、

「ほうう？」

「叔父御にお氣の毒のことゆゑ、いささかお訊ねが滞る」

「何事で御座らう？」

「お身様は、酒卷幾之進を、處分なさらずに捨て置かれる」

「え？ 酒卷幾之進を？ 幾之進が怎うぞ致しましたか？」

「どういふ理由で、彼奴を成敗なされぬかを訊いてゐるのぢや」

「なに、成敗などと——異なることを承はるぞ。幾之進は、まことに忠實な、そして頗る役にも立つ

奴で御座るに？」

叔父が怪訝な顔をする時、信長は、いかにも豪放な、持ち前の笑ひ方をして、

「忠實なのが。——その變に、忠實なのが、曲者でござるよ」

「なんと！ 忠實なのが曲者とは？」

「妙な役に立つのが不埒だ、と申すのだ」

「それはまた何故に？」

いよ／＼解らなくなつてきた。忠實が曲者で、役に立つのが不埒では、詭辯すぎる。

「わはッはッは、それは露らさまに、この信長の口からは言はぬ方がよささうで御座る」

「はてなう。お訊ねになりながら？」

「これだけ暗示しても、まだお氣がつかんなら、第二の質問は、敢て撤回する必要もないけれど、ま
あ當分は保留といふことに致さう。とにかく清洲の方を、先に片附けるやうにして下さい。それが、
お身様のためにも、俺のためにも宜い。死んだ中務爺の口真似をすれば、尾張の爲ぢや」

「清洲の件は、とくと心得申した。その方は、合點が参つたのみならず、身共に成算が御座るし、多
年苦しめられた病魔にも、つひに打ち克ち得た信光が、更生の第一歩として、まことに成し榮えのあ
る任務とも存する次第ぢやが、當ぶんは保留すると被仰る事柄が、まるで、皆目——想像さへもつき
かねますでな、どうも氣にかゝる」

信光は、神経質の表情を、かなり尖らせて、訴へるやうに云つた。

しかし信長は、首を振りつゝ座を立つて、

「否々。知らぬが佛に、なつて居られる方が、當分は遙かに増だと思ふ。——老咳の豫後に、二兎を
逐うては、一兎をも捉へ損ねるといふ、心配が御座らう。——ではこれでお暇する」
と、云つた。

「殿——」

止めようとするのを、

「もと／＼幾之進の件は、叔父御の長々の病ひが因だとも云へる。お身様の病弱が、つくらせた咎

だといつても、間違ひではない。むろん、お身様一分にとつては容易ならぬ事柄では御座るが、しか
し尾張一國の安危とは直接、かゝりは稀薄だ。だから、後廻し、後廻し——」

さう云ひつゝ、さつさと書院から出て行かうとしたので、

「あゝ暫く——」

信光が、起ち上つて後ろから追ふと、信長は一度振り返つて、

「清洲へは、今日信長から此の城を、取上げられたとでも、何とでも披露なさるが、いゝ。要するにお
身様の機轉に委せませすぞ」

と、いつた。かと思ふと、もう其の姿は見えなかつた。

(八)

來た時と同様にあわたゞしく、飄忽と歸り去る信長を、城下の暇まで見送つた叔父信光ではあつた
けれど、その見送りは、ほとんど見送りの意味をなさなかつた。

と、いふのは、信光の馬が暇に達した時は、すでに信長の乗馬すがたは、數町むかうの森陰に没し
てゐたからである。殿走の扈從の馬さへが早、この暇からは餘ほどの距離に去つてゐたのだ。

(まるで颯のやうな殿よ！)

信光は、いまさらのやうに、さう思つて、しばし颯の上に佇むのであつた。

信光の視線は、馬上から、低徊した。

「何を御思案なさいまするか？」

さう、訊ねたのは酒卷幾之進だ。

幾之進の馬は、堤へ上つてきた。

だが、信光は返辭を與へなかつた。信光の眼は、低徊を罷めて上向いた。そして一度、この疑問の男の顔を眺めたが、視線は直ぐ外れて、柿紅葉の方へ向けられた。

あかるい紺色の空の下で、五所柿の紅が映えてゐた。先刻、信長主従が、這入るだけ腹へ詰めこんで、餓じさと喉の乾きを癒やしたのだから、柿の数は食はれた数だけ減つてゐるわけだが、しかしそんな減り目の見えるやうな、ぼつちりな柿並樹ではなかつた。

(此奴、何をしたのだらう？)

信光は、頭のなかで詮索を、また繰返した。——末森か、清洲かへ、心を通はせて、なにかしら陰謀をたくらんだものなら、尾張一國の安危にも直接關はることでないか？ とところが、尾張の安危には直に關はることでないから、その方の解決、すなはち此奴の處分は、後廻しで宜いといふのだ。

——然う云はれたのだ。信光は、信長に云はれた事を一語一語を、出来るだけ噛み砕き、及ぶかぎり噛みしめて見た。

(たしかに味へば、解るやうな氣がする)

けれども、自分一人には容易ならぬ事だといふ、その容易ならぬ事の性質が、依然として見當もつかない。味は感じられても肝腎な正體が、とても捕捉出來さうにないのだ。

(それにしても、成敗せよ、と暗示されたのだとすれば、どの途、相當な悪事にちがひないけれど、さて？)

たのもしい股肱の一人と信じてきたものを、罪過もたしかめずに、輕はすみに疑ふのは良くない。

——が、

「果して……」

思はず、口走ると、

「何事か、御難題でも？」

と、幾之進が、馬を寄せた。

齡ごろは廿四五、でつぷりと脂肪ぎつた丈夫さうな體格の、と同時に精神も至つて健全らしく、容貌も極く篤實に見える立派な士なのである。

「うむ！」

信光は、頷いてみせた。

「では矢張、噂にたがはぬ狐々馬さまで御座りましたか？」
幾之進が、案じ顔で云ふと、

「いや違ふ」

ぐいツと睨むやうに見据ゑた。

でも幾之進は、すこしもたじろぐ面持が無かつた。

(解らん！)

信光は心で呟きながら、

「狐々馬なら怖くはないけれども、あれでは全く暴君ぢやよ」と、答へた。

「おゝ、暴君だと仰有いまするか！ して如何なる御難題で御座りましたぞ？」

「俺は今日かぎり、浮浪人も同然になつた」

「えゝつ？」

彦五郎最期

(一)

面は凝脂の如く、眼は點漆の如し。

これは、美人の形容だ。凝脂といふのは、こり固まつた脂のことで、柔かくて滑らかなものゝ譬へにいつた言葉だし、點漆は説明するまでもなく、漆で描いたやうに黒い光澤のある目だ。

目の黒さと、眉の濃さとは、妙に正比例する。また肌の柔かな女で情の淡いものは、およそ稀だから不思議だ。だがこれも考へ方によれば、不思議でも妙でもない。女の美しさ、嬌やかさといふものは、要するに肉體の性的特徴が、よけい現はれゝば現はれるほど増すものなのである。

もちろん例外はあらうが、美人は色を好む。色を嗜むやうな性質であればこそ、美しいのだとも云へる。

「たとひ怎のやうな憂き目をみようとも、わたしは其方を思ひきれぬぞえ！」

「お、拙者も同じ心で御座ります。よしんば此身は逆磔の御處刑はおろか、牛裂でも八ツ裂でも厭ひませぬ。油の釜で煮られましても、つゆ後悔は致すまじき覺悟の心底——いま奥方が、たち割つて見せろと被仰るなら、ほんたうに御覽に入れまするぞ……」

「あ、嬉し！ そんなら兩人は命かぎり」

「もとより命かけの戀で御座りました。さもなくば空怖ろしい密通が、道ならぬ不義不倫が、なんとして斯うは大膽に出来ませうや、奥方、未來永劫おそば離れぬ拙者で御座ります」

「ほんに世にいふ悪縁であらうのう！」

「死んでも離れぬ決心なら、強う御座りますぞ」

男は、酒卷幾之進であつた。

「お、私はあり難いぞや幾之進」

女は、信光の妻、刈葉であつた。

「拙者こそ、勿體無きの涙が溢れまする」

「罪の快樂ぢや！」

刈葉は、男の手を握つて、引き寄せてから靠れかゝつた。

閉めきつた部屋の温もりが、姦婦姦夫の顔を火照らせてゐた。狭い室とは不釣合に大きい火鉢には

縁の焦げるくらの炭火が眞赤におこつてゐるのだ。炭の燃焼によつて生じた炭酸瓦斯のために、兩人は先刻から軽い眩暈を感じてゐたが、兩人の昂ぶつた氣持からはその眩暈さへも、純粹な情愛の燃焼作用のひとつと思はれた。それほどに不貞な妻と、その不義の相手とは、興奮してゐたのであつた。なぜさうした興奮が、兩人を捉へたかといふと、刈葉は今朝まつたく唐突に夫の信光から至極冷かではあつたが、諷こすられた。傷もつ脛は、そつと觸られても痛い。夫が果して怎の程度まで感づいてゐるか、それはまだ疑問だつたけれど、とにかく刈葉は、密通の露瀝を覺悟しなければならなかつた。幾之進と通じたのは、もう久しい事だつた。夫信光が、老咳病軀をほとんど絶望的に横たへてゐた數年間は、つひに刈葉を堪へがたくした。獨り寢の聞さびしさにうち負かされたのだ。決して、特別に邪な心を持つたわけではないが、肉體が色を嗜ますにはをれないやうに出来てゐた。つまり、さうした境遇に置かれれば、姦夫をこしらへて、不貞を餘儀なくする外ない質の美人、それが此の刈葉だ。

「奥方！」

「幾之進！」

姦婦姦夫は、密室のなかで相擁した。

そこは、清洲の「南櫓」と呼ばれる一郭内——奥庭に圍まれた離亭の一室だつた。

信光は、一家眷族家來どもの總てをつれて、去年の秋の暮に守山の城から、こゝ清洲へ移り住んでゐたのである。

(二)

濃尾は日本全國でも屈指の、美人國だ。

昔から昭和の今日まで、その美人系は連綿とつゞいて、たとへば柳暗花明の巷に例をとつてみても、名古屋種、おきあアせ種が、いかに幅を利かすかは、思ひ半ばにも過ぎよう。たゞしそんなことは、こゝでいふべき適切性を持たぬとすれば、美人の代表者みたいな淀君は怎うだ。いはゆる濃尾美人系が生んだ赫耀たる産物ではないか。

して見れば、濃姫も、岩室も、お勝も、みな非常に美しく、しかも今、われ／＼の物語に登場した刈葉がまた、極はめて艶やかであつても、一向訝しくはないわけだ。

つまり此等の、どの女性も、選ばれた美貌のために、それ／＼特殊な環境におかれ、その環境が特殊であつたからこそ描寫されるものだ。

事實、刈葉は美貌だつた。美貌であつたが故に、夫の信光はこれを溺愛した。去年の秋の陽光に輝く紅葉の輝くある日、信光は、妻の姦通を暗示された。そして今年の正月、つひに刈葉と幾之進の醜關係を、自分でも疑ふ餘地なく慥めることが出来た。にも拘らず、斷然たる處置を採ることが、躊躇はれた。なぜかと云へば、溺愛の愛妻を、失ふに忍びなかつたのである。

(姦婦でも、まことに残念ながら相變はらず、可愛いのを何としよう！)
遺瀨ない未練が残つた。

(幾之進めを斬らば、刈葉は生きてはゐないだらう。刈葉に死なれては、俺とても生き存らへる張合ひがあるまい。そんなら幾之進めを斬ることは止めて、追放しては怎うか？ だめた。かならず刈葉は、情男のあとを追つて、いづれかへ逃げるだらう。よしや引留め得たにしても、結局それは彼女を死なせることになる)

さう思はれた。

まつたく目も無ければ、性根も無いやうな愛だつた。現心を何處へか、ふツ飛ばしてしまつたらしい愛し様だつた。

痴人の愛といふ詞がある。それだ。信光の溺愛がそれだ。

ほかの點では、斷じて痴人どころではない人物でありながら、たゞ一つ、閨の情となると無二無三に恐かしく、だらしなく仲びてしまふ。

姑息な日ばかりが重なった。

(姦婦姦夫への一日のぼし、自分自身への一日のぼし！)

信光は、さう意識しつゝも、来る日も来る日も徒に過して行つた。

腑甲斐ないとも感じたし、姦夫であり奸臣である幾之進を烈しく憎む氣持にも、たえず揺すぶられた。だが、せい／＼諷てこするぐらゐが關の山で、その山からは怎うにも下り様が無かつた。

弘治元年の正月も、いつしか過ぎて、梅の花散る二月半ばの——ある夜。

「そなたは嘘、夜が物憂いであらうの？」

と、信光が云つた。

「あら、妙なことを……」

中年増の、練れに練れたやうな媚が、むつと飽えて匂ふがごとく、刈葉の姿態から發散するのだつた。そして、のめのめと、恥を知らぬ氣に柔肌を蠕動させながら、

「こんな娛しい夜が、物憂いとは？ まあ何を被仰るので御座います？」
と、白をきつた。

「晝間のやうな娛しみが、なんぼ大膽な其方にも、出来にくからうではないか」

密男との嬉皮が、晝のあひだにのみ行はれてゐることを、信光は云つたのである。

(三)

しかし刈葉は、とどの詰まりの土壇場を覺悟してゐたから、うろたへる氣配が無かつた。

「わたくしはもう、このやうにたんのういたしてをりますものを、この上、……ほほ、そんなに慾の皮を張らせましては、冥利がつきて罰があたりませうぞえ」

「ふん、狸女め！」

「このやうに肥つてをりますゆゑ、どうせ私は狸で御座います」

「狸の穴が、古渡に知れたのが不思議ぢやてなう」

「え、なんで御座いますつて？」

「古渡の殿が、どうしてお探りになつたか、俺は、それを訝しんでゐるのだ」

「古渡の殿が、どうぞなさいましたか？」

「古渡は狐々だから 獸 同士、それで狸の穴が知れたのかもしれないが、ちえ、俺は憂鬱で憂鬱で、氣も魂も狂ひさうなのだ！」

「おやまあ今夜は、どう遊ばしたので御座いますか？」

「刈葉、ほんたうの事を云つてくれ。あからさまに其方が白状して呉れさへすれば、俺は其方の咎を、犯した罪を、問はうとはせん。許してやるのだ。だから包まずに、匿さずに云つて呉れ、頼む！
な、頼むのだ」

信光は、そこまでは云つたが、それ以上には進まなかつた。進み得なかつた。
進めば、怖ろしいことが、起るだらうと思はれたからだ。

（おれは、なんといふ卑怯者だらう！）

じつさい、この點では、極端に怯懦な信光ではあつたが、しかし清洲の彦五郎を滅ぼすために必要な準備は、ごく秘密裡に着々と抄んでゐた。

——すると、情事すなはち男女の情緒にかけての卑怯者も、ほかの事柄となれば、かならずしも懦夫ではないのだ。

清洲の南矢倉に居を移して、乗すべき機會さへあれば、一舉に殲滅を謀らうとするのは、するぶん甚だしい冒険といはなければならぬ。ちよつとも間違へば、あべこべに自分の一家郎従が皆殺しになる。その危険を、勇敢に冒してゐるのだから、まづ虎穴に這入つて、虎兒を獲ようとする類だ。度胸が無くては爲れる仕事ではない。で、それを爲す信光が、なんで懦夫であらう？

さあ然うなると、信光は、卑怯者であると同時に卑怯者にあらず、といふ逆説が生じる。

この矛盾を、たれよりもよく呑み込んでゐたのは、刈葉だ。
だから、敬びもしたが輕蔑もした。怖れもしたが甘くもみた。

「存じませぬ。包み匿した覚えなど、わたくしはさらさら御座いませぬものを」
知らぬ存ぜぬの一點ばりだ。どこまでも不貞ぶてしさを極めたのであつた。

「刈葉つ、知らんとは言はせぬぞ」

「おほ、何とでも被仰いませ」

美しい妻は、妖婦だつた。淫婦だつた。

信光は、妻の不貞不逞しさを、自分の心の一面では、はげしく憤り悲しみ、つよく憎み厭ひつつ、また同じ心の一面では、これを倅ひの宜いことにして、臭いものには蓋をせよ、腫れ物には觸るな流儀に、なぞらへて、

「あくまでも、覚えが無いと云ひきるのか？」

と、いかにも懦夫らしい慥め方をした。

刈葉が、濃艶な媚笑ひで答へると、

「ちえ、こゝな狸女めが、腹鼓を打つぞ！」

ぐんにやりとなる信光だった。

(四)

(おれは、彦五郎を滅ぼさへすればいい。殿信長に委託された任務を、果しきへすればいい。餘事はどうでもいゝのだ)

と、信光は思つた。

(亡き兄、信秀の殿は、都の長きあたりへも忠節を奉つて、宸襟のおん端をも安んじまらせた尾張の主だった、その主の總領たる今の殿信長のために、おれが彦五郎を滅ぼすのは、信長の唯ひとりの叔父たる者の、最も本懐とすべきことではないか。それさへ成し遂げれば、河東二郡の土地が、おれの所領になる。不貞の妻の罪惡を、たとひ不問のまんま、打捨つておかうとも、自分の胸一つがそれで納まつて行くものなら、あへて構はんと考へられる。妻が犯した咎も、もとをたゞせば此の俺の、病身がさせた過誤だ)

自分に都合よく諦めてしまつた信光だ。

(刈葉の不義よりも、おれの病弱が責められなければならん。あの健かな、豐滿な肉體の、温熱い

肉置と血管によつて醗酵される情慾に、もし吐け口がなかつたら、どうなることぞ。吐け口を塞げといふ要求は、なんとしても無理だ。吐け口が完封されたとしたら、刈葉は狂氣になるほかあるまい。氣が違ふ代りなら、不義も赦されようではないか)

おツそろしく肉體本位に、機械的に考へたものだ。

信光のやうに考へたら、萬物の靈長たる人間の値打が、半分すぎ値切られてしまふ。

だが、信光としては、倫理などは怎うでも宜かつたのだらう。ひたすら事擧げの日を待ち構へた。

待機の姿勢が、次第々々に緊張して行く間に、咲いた櫻が散り敷いて、あわたゞしく春が過ぎ、若

葉が初夏を持つてきた。

すでに四月も、ちやうど廿日。

五條川の水は温み、岸への柳には翠が色を添へ、梢を掠めて飛ぶは燕だ。

暑からぬ陽が、照々と照り輝き、青い空には白い斷れ雲が、二つ三つ、ふはふはと浮いてゐるのみ

で、おだやかに快く晴れた風が日和——。

(いゝ日だ)

坂井大炊助は、極上機嫌で馬からおりた。信光に招かれたのだ。

本丸から南矢倉まで、わづかの距離だ。總構への内部のことだから、むろん歩いても知れてゐる

が、今日は特に威儀を整へる必要を感じて、重立つた人たちは、みんな馬で乗りつけたのである。

坂井甚助が、恵比須顔で下馬した。

やがて、坂井大膳の大黒擬ひの莞々顔が見えた。

坂井の家は、昔、清洲織田家が、守護と呼ばれた時代には、小守護と稱して、政治を代擧して第一の重臣だ。

だから、清洲では、威張つてゐた。就中、大炊助は主君彦五郎に深く頼みにされてゐる豪傑であつた。どれほども頭は利かなかつたやうだが、腕は利いた。力もあつた。で、この大炊助をさへ驚せば、彦五郎家を滅ぼすことは、なんの雑作もあるまいと、さう信光が考へた。

謀計は、この考へを土臺にして、めぐらされてゐたのであつたが、いよくそれが決行の運びとなつたのだ。彦五郎家の重臣どもは、まんまと謀られた。彼等は、信光の七枚起請を信じて、疑はなかつた。

南矢倉の、出迎への郎従が、

「坂井大炊助殿の御入りつー」と、叫んだ。

(五)

大炊助は、玄關から廊下を案内の者の後ろに跟いて、歩きつゝふいつと、廣敷へ目をやって、おぼえず、

(やッ！)

足を停めた。

廣敷には、武装兵が、ぎつしり詰まつてゐた。廣敷の縁側にも、縁そとの庭にも、兵が充満してゐるのだ。長巻や槍の鞘をはらつて、焼刃と穂先をキラキラ閃めかせてゐる状態は、いつかな尋常事ではない物々しさではないか。

「あ、あれは何だッ？」

「御餘興で御座る」

「なに餘興とは？」

「今日の御饗應に、武者揃ひをお目にかけてようといふ、主の用意で御座ります」

「ほう、武者ぞろひ？ とは又、意外な御趣向ぢやなう！」

大炊助は、廊下をまがった。

まがりかどには、杉戸が開いてゐた。開いてゐる其戸口から、目にも止まらぬやうな迅さで、一筋の槍が繰出された。

それは丁度、大炊助が曲つた時、その背後を襲つたのである。

「呀っ！」

灼熱！

脊中のまん中右に、熱い打撃を感じた。激烈な衝撃である。刹那の前、逼迫の殺氣と、槍風とも謂はゞいふべきものを感知は出来た大炊助ではあつたが、能く躲せなかつた。躲さうとしたにはした。左へ身を捻つて腰の刀を引抜きざまに、右に振りむきかけたところを、だが穂先に穿されたのであつた。痛いよりも灼かつた。灼いよりも猛然たる壓力の方を、よけい感じて劇しく前へよろけ、のめらうとして踏み懐へた。それが悪かつた。むしろ突んのめつてしまへば、傷は浅くて済んだのを、なまじ踏み懐へたため、えぐられた上に捻りを喰らつた。骨の間から右の肺臓を、穂先深に刺された事を意識して、

(やられたッ！)

と、思つた。後悔と、狼狽と、忿怒とが、一緒くたに渦をまいて、

「おのれッ！」

さげんだ時、槍が手繰り引かれた。

「角田石見ぞ、貴殿の命、申受けたッ！」

と、さう名乗りつゝ再び繰出す槍先と、大炊助の刀の銚子尖とが、要と鳴つて、忽ち離れた。

「卑怯なり角田ッ！ なんの意趣か？」

重傷に屈せず、大炊助は、大刀をがっちり構へた。

「坂井殿覚悟あれ。一身一箇の意趣ではないのだッ！」

角田石見は、信光の家來中では屈強一の猛者だつた。大身の槍をしごいて、いま一突と三たび繰出す鋭い穂先。——それが高腿を縫ふのを、薄疵に縫はせて剛氣な大炊助は、千段巻を引摺むが早いから石見の手許へ躍り込む。

「えゝっ！」

「たうっ！」

石見の刀が、はッしと受止めた。槍を捨て、今や鏑競りあひ。蒼白な顔と、顔と。

「一身一箇の意趣でないとは？」

「主君信光が、清洲殿の御首を頂戴する、その先觸れたッ！」

「やあ、然らば謀叛かッ？」

「ちえ謀叛よばはり片腹痛し！」

「なにをッ？」

「清洲殿こそ古渡への謀叛人ぢやい！」

刃と刃が、颯と開いた時、廊下つゞきで悲鳴が聞えた。

(六)

悲鳴は、不意討ちに斬られ、突かれた者の聲であつた。

魂消える聲。痛手の喚き。きあーあッ、ぎやーあッと、致命の、末期の、すさまじい叫びが、屋内のそこにも此處にも、けたましく起つたのである。

おそはれた側からいへば、まさしく不慮の突發事だが、襲つた方は長い準備と、待ちわびた待望の結果でしかなかつた。たゞし、それは南矢倉の主謀者の計畫であつて、兵は今朝まで何も知らなかつた。雑兵などは、つひ今しがたまで、ほんたうに餘興の武者揃ひの爲とばかり思ひ込んでゐた。謀計は密なるを佳しとするといふ趣意が、充分おもんじられたわけだ。敵を欺くにはまづ味方を欺くこと

が必要だと、さう信光は思つたのだ。だから此の計畫には、ごく少數の重役どもが、あづかり知つたのみだつた。信光は、妻の刈葉にも、この事は暖氣にも洩らさなかつた。溺愛の痴情は、それこそ殆ど垂れ流しといふ體たらくで、だらし無く腐やけながらも、事苟くも此の密謀に關する限りは、微塵も氣をゆるさなかつた。そこに信光の、妙な二重性があつた。この二重性が無かつたなら、清洲を滅ぼすことに、あるひは失敗したかも知れない。だが、清洲を没落させるために非常に役立つた此の二重性が、やがてまた、信光自信の身を滅ぼす機縁にならうとは、むろん解らう山もなかつたのであつた。

とにかく企らみは、圖に當つた。

「河尻左馬を、小瀬三右衛門が討取つたり」

「雜賀修理の首、佐々孫助が掻切つた」

「古澤七衛を仕留めたは、土肥孫左衛門ぞ」

喚はる大音聲が、つゞいて起つた。

坂井大炊助も、つひに斃された。羅刹のやうな物凄い相形になつて、荒れ狂つたので、角田石見も持てあましたが、廣敷の一隅へ、多勢がかりで押取り籠めて、亂刃を隙間もなしに浴びせたのだ。

大炊助が斃れた時は、廣敷も、廊下も、玄關も、みな累々と死骸を横へ、血の河を流して腥臭い香

を漲らせた。だまし討ちは、もつとも効果的に果たされた。屋内から遁れることのできたのは、名ある士では、坂井大膳、おなじく甚助くらのものだった。だが、その甚助も逃げる途中で息が絶えた。郭の空濠の藪かげに身を潜めた大膳だけが、あやふい命を免れたのである。

具足を鎧つた信光が、

「攻めろッ！」

と、馬上で下知した。

「進めいッ！」

と、家老の矢島四郎左衛門が叫んだ。

「一気に亂入して、壘殺しにせよッ！」

先陣の將、赤河三郎右衛門が、大刀の鞘を拂つて振りかざした。武装堅固な將兵が、清洲の本丸へ、意氣軒昂と殺到した。謀殺を完全に仕とげて、勇氣が百倍したおもむきのある軍勢だ。氣を得た一兵は、能く十兵に當ることが出来るし、氣を挫かれた百卒は、たやすく十卒に敗れる。すでに坂井大炊助をはじめ老臣、重臣の多くを討取られた城方は、たゞあわてふためくのみで、防禦らしい防禦は、とても出来るものでない。

「だ、だ、だめだ！」



「逃げるッ！」

蜘蛛の子を散らすやうに、逃げ散るのである。

(命あつての物種だ)

(畑があつての芋種だ)

(逃げ替へのない雁首だ)

四方の門から逃げ出したのである。

(七)

大手、搦手、右、左の、四方の城門から逃げおくれた輩は、土居から轉げ落ちて腰を打った。石垣から飛びおりて足を痛めた。濠に嵌まつて水を呑んだ。女を抱へて泥に没した。女は怯えた。兒女は泣いた。逃げおくれて、老ぼれが斬られた。阿鼻、酸鼻。

人とする態は、人にとられる。因果はめぐる小車だ。去んぬる天文十八年、北櫓の午睡の夢を叩きやぶつて、斯波の主従眷族を、茶坊主までも鏖殺しにした清洲の城兵どもは、それから丁度七年目の今こゝで、こんどは逆に、南櫓から、まッ逆寄せに本丸を、襲はれたのである。油斷もまさに同じ様。

さながら午睡の最中をやられたと變はりがなかつた。ほんたうに油斷こそは大敵だつた。彦五郎家は織田の本家本宗だし、清洲の城の本丸は尾張では一番大きな規模をもつてゐたし、いかに衰へたといつても、まだく相當な力はある筈なのが、これはまた何といふ見苦しいことになつたものよ。それは慥に、醜體を通り越してゐた。どう最負目にみても、城の人々は、城兵とは云へない群衆に過ぎなかつた。たゞ狼狽に狼狽して逃げまどふ烏合の衆であつた。

もちろん逃げ場を失つた者どもは、闘ふほかない。闘つた者は、斬られもしたけれど、また斬りもした。だから寄せ手にも死傷は出たが、しかし一旦勢ひに乗じた兵の力といふものは、驚くべき潰滅作業をやつてのける。わづかばかりの時間に寄せ手は、抵抗した敵の大部分を殺してしまつたのだ。城内には、屍臭が満ちあふれ、凄惨な鬼氣が哭した。また死にきれぬ重傷者が、いたましく藻掻き呻いた。館の隅では、息が絶えたと思はれた士が、むつくり起きて血刀を振つた。縁の柱にしがみついて、氣が狂つたやうに叫んでゐる血達磨の男もあつた。まるで幽霊が小迷ふやうに、庭をうろつく手負ひ女も見えた。

彦五郎信友は、館の屋根へ避難した。

(敵のゐない處へ！)
と思つたが、どこも彼しこも敵だつた。城ぢうで敵のゐない場所といへば、屋根の上だけだつた。

(七年前に、義統は屋根裏で殺された)

あゝ不吉だと感じたが、縁起の宜いわるいを考へてはをれなかつた。

(一寸のがれ、五分のがれ！)

彦五郎は、数名の近侍と共に、屋根へ登つて、葺傳ひに、棟へ匍ひ上つた。そして土氣色の顔を、ひきつらせながら喘いだ。

「殿！ 御覺悟あそばす他ございますまい」

「空とぶ鳥ならでは、とても駄目かなう？」

「望み御座りませぬぞツ」

「だが、予は死ぬのは厭ぢや」

「お厭でも是非無い次第で御座ります」

「是非なくても自害は厭ぢや」

「殿つー」

「殺されても自害は厭ぢや」

「御未練なツー」

「未練か知らぬが、腹は切れん」

「あゝなんといふ御腑甲斐なさだツー」

「切腹は困るよ予は」

「お腹が召しにくゝば、おん喉笛を突かれませツー」

「殿つー」

「上つー」

「喉も苦手だ」

「ちえゝ情無い、そのお言葉……」

「情無いのは予だ、予の云ふことだ。其方らは百に一つくらゐは助かる見込みが、無くはない。だが予は萬に一つも駄目だ、駄目だ、駄目だ！」

(八)

彦五郎は、駄目だ、駄目だと、連呼した。

ちやうど斯波義統が、天井裏で窮まつた運命に面と對ひあひながらも、諦めることが出来ずに、あくまでも見苦しく生に執着したやうに、彦五郎もまた、免れがたい死から脱れようとして、あがき、

悶えた。

自分が襲ひ殺した義統であつただけに、その末期についての記憶が、今かうした危急の祭にも、自分の頭に、ひらめき浮ぶのを、けしとばし得ない彦五郎だつた。

（あゝ今ぞ、今ぞ思ひ知つた！ 斯波は、義統は、さぞ死に度くなかつたらう。どんなにか、殺されなくなかつたらう）

いかにやぐざでも、命の惜くない人間は無いであらう。斯波義統といひ、この彦五郎信友といひ、その生存價値は、どれほどの値踏みも出来なかつたかも知れないが、しかしそれは客観的な観方であつて、主観的には全く別だ。

だから、義統の天井裏の場合も、彦五郎の屋上の場合も、けつして不思議な現象ではなかつた。たゞすこし念入りに特殊なだけだ。それも一方が足利高經の後裔でなく、また一方が織田の本案でないとしたら、その特殊さの程々さへもが、格別なことはなくなる。

「敵つ！」

「敵つ！」

叫んだ。彦五郎が叫んだ。家來どもが叫んだ。

ぬつと現はれた敵が、

「清洲殿！ お首頂戴に参つた」

さう云つて、のそのそと薨を踏んで登つて来る。やゝ近づいて、

「古渡から参つた拙者でござる」

と、云ふ。

あとから、あとからと敵が、屋根へ上つて来る。

彦五郎主従は、地言のわからぬやうな喚き方をした。どの眼球も、とび出しさうに見えた。極度の

恐怖のために凸出したのだ。

まつ先に登つてきた士が、

「お見それで御座るか。拙者は森三左衛門。——古渡の側役、森で御座るぞ」

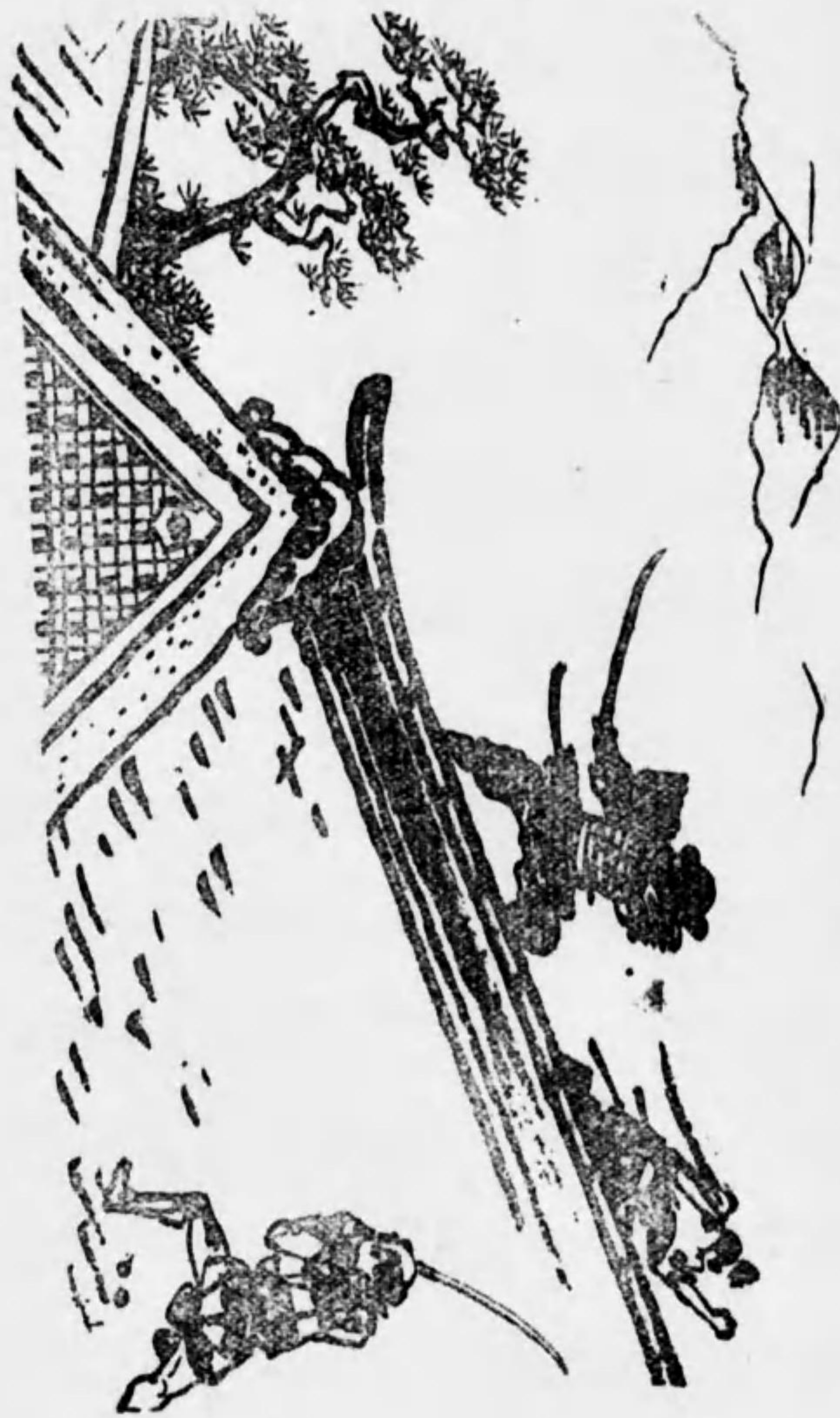
と、云つた。

さう名乗るまでは、それが誰人なのか、彦五郎には識別がつかかなかつた。森の顔の見分けが、出来ぬくらゐ、心は顛倒し、眼は惑亂してゐた。

「あッ、森！ 森！」

「三左で御座る」

「こ、こ、殺しに来たのかッ？」



「いや拙者は、お身様のお首を、頂きに参加したまでぢや」

「お、おなじ事だッ」

「違ひまする。さあ尋常に、御生害あれ」

「え、その生害が、厭なのだア」

「御介錯だけは仕らうぞ」

「介錯されたら首が飛ぶ」

本能的に、彦五郎は、両手で自分の頸を禦ぐやうに抱へて、身を縮こめた。

「ふ、ふ、ふッ」

と、森三左衛門が冷笑をあびせた。

「わ、わ、笑はゞ笑へ。予や死にたうないのだッ」

まったく、言語道断な怯え聲を、ふり搾つたのである。

「清洲殿ッ」

と、三左衛門が呟鳴つた。

そして、ざらりッと大刀を抜き放つ。

「わーあッ」

彦五郎は竦み跟けた。

「いざッ！」

促した。切腹を、促したのである。

だが彦五郎は、腹を切らうとはせず、逃げ出さうとしたので、三左が大喝一聲——えゝつと、刃を閃かした。

「ぎやーあッ！」

血煙をあげつゝ、挫と彦五郎が仰反り仆れた。

蝶 瀆 の 河

(一)

(おゝ俺は！)

酒卷幾之進は、闇の中で胴顛ひをした。

(五逆罪のうちでも！)

一ばん重い罪惡だと、さう感じたのだ。

五逆罪といふから、五つの罪惡にはちがひないけれど、それが何と何かは解つてゐない幾之進だつた。——この五逆罪といふ言葉は佛家の語であつて、元來は、父を殺すことが一つ、母を殺すことが一つ、佛身から血を流すことが一つ、阿羅漢を殺すことが一つ、それから和合僧を破ることが一つ、都合五つの罪で、その一つでも犯せば、きつと無間地獄へ落ちると、さう教へたのだつた。

だから、幾之進が、これから犯さうとする罪は、ほんたうは五逆罪の中には這入つてゐない。たゞ

し、佛説が普通の倫理に俗化されて、後には主君ならびに父母と祖父母を殺すことを云ふやうにもなつたが、幾之進は、そんなことは知らなかつた。

たゞもう、人間の罪惡中で最も重い咎だと思ふので、胴ふるひが出たのだ。

(しかし……背に腹は換へられん)

幾之進は、手さぐり、足さぐりで、暗い廊下を、できるだけ音を立てないやうに、しのび近づいて行く。

近づいて行くとは、何處へ？

主君信光の寢所へである。

無間地獄でも、焦熱地獄でも、構はん。落ちるなら落ちろ。構ふものか、針の山でも血の池でも、厭ひはせん。……なアに死んで後などは、怖くないぞ！ 俺の恐れるのは、俺の殺されることだ。この娑婆で呼吸をしてゐる此の息の、絶えることが一ばん怖いのだ。息が絶えれば、あの美しい刈葉様の、顔を見ることが、肌にも触れることも出来なくなる。俺には、どうあつても、それが怖へられない。俺は、生きてゐなければならぬのだ。そして、生きてゐるためには、どうしても此の罪惡を犯さなくてはならない。もし、犯さずにゐたら、俺が殺されて了ふ。未來後生は怎うでもいゝ。大事なものは今眼の前の娑婆だ。あの方の、熱い血と觸れ合ふことの出来るのは、たゞこの娑婆だけだ！)

寢所の入側まで近づいて、そこで息を凝らした。

廊下と入側とを隔てる戸は、開いてゐたけれども、入側と寢室とを劃る、あはひの襖障子は、閉め

きつてあつた。

息を潜めつゝ、幾之進は、

(背に腹は換へられん！)

心の奥の底で、ふたゝび叫んだ。

(殺されるか、殺すかだ。殺さなければ殺される。あくまでも殺されるのが可厭なら、かうして殺す

ほか、無からうではないか)

寢室——主君信光夫妻の間の氣配を、ぢいつと窺ふために、しばし耳をそばだてゝゐると、蚊帳の

裾が、かすかに疊に擦れる音がして、やがて、すうーつと靜かに、襖障子の一枚が、披いた。

披けたのは、刈葉だ。

几帳のわきの蘭燈の、おぼろ明りが、わづかばかり入側の闇へ洩れた。

もちろん、情男が忍び寄つたのを知つて、闇の蚊帳から出た彼女にちがひなかつた。

だが——

「おゝ蒸し暑いこと！ でも、これで少しは靜たうしさが……」

さう、獨り語りたいに、刈葉が呟いたのである。

幾之進は、いくらか呼吸を荒くしたのみで、黙つてゐた。闇の中で蹲踞つたまつた。

——深更だつた。

館のうちは、しんと寢静まつてゐるのだ。

(二)

どうしたのか刈葉は、襖障子一枚を披けただけで、獨り語を云ひつゝ蚊帳の中へ戻つてしまつた。

幾之進は、一度握り締めた柵の手を、ゆるめて、

(信光の殿は、清洲殿をほろぼしたお手柄によつて、河東の二郡と、この那古屋の城の、主となられた。御境涯も變つたが、お心持は尙更變つたのだ。清洲の南櫓に住んでゐた頃は、おれは慥に安全だつた。しかし俺は、近習といふお側近い役の身でありながら、清洲殿を不意うち討つて、あの本丸を乗つ取らうといふ計畫を、兎の毛のさきで突いたほどさへも知らなかつた。俺は、ほんたうに莫迦々々しいやうな話だが、坂井大炊助たちが斬られるまでは、餘興の催しの武者揃へだと思ひ込んでゐた。末輩どもが何も知らずにゐたのと、おれの場合とは、大違ひだ。あの計畫を、奥方とこの幾

之進が、あづかり知らなかつたといふのは、取りも直さずこの幾之進の生命が、ひとく危いといふことだ。謂はゞ、棺桶の縁に立つてゐるやうなものだ。ちよいとでも衝かれたら最後、それつきりなのだ。俺はもう猶豫したら助からない。全くさうだ。やつとこさ今夜は、あべこべに棺桶の縁には、俺の代りに殿を立たせ申すことが出来た。だからほんの一衝きなのだ。ひと衝き！ひと突き！ひと刺し！心を鬼に！)

さう、思つて、緩めた手を、柵を、握り直した時——

蚊帳の裾が、擦れ揺らいで、

「おゝ暑！もう寝苦しいこと……」

と、刈葉の聲。

鯉口を、くつろげて、

(南無阿彌陀佛！)

幾之進は、もはや胴顫ひはやめて、襖口へ、闕へ、やゝ近寄る。

蚊帳から出ようとして刈葉が、低い聲で、夫の信光へ、

「貴方！」

と、云つてみた。

だが、信光は答へなかつた。

うけ答へをしなかつたのは道理である。

——寝穢く、枕をはづして、仰向けの頭を、褥敷きから疊へ、飲み空けた瓶子や、食ひ散らしの食器の間へ、はみ出させて、泥のやうに痴れ酔ひ潰れた眠りは、たとへば淵の底みたいに深い。

ゑみ割れた柿を、腐爛した酢に漬けたやうな、すつぶし臭い息の臭気だ。

あゝ不覺にも！

不覺にも、信光は、姦婦の良に、ふかふかと嵌まつてゐた。

不貞な妻は、臭氣に顔をしかませながら、間近へ寄り添うた。

そして、さらに小聲で、

「殿」

と、呼んでみた。

華車とは云へないが、柔ツこい、圓々と肥えた指が、ちよいと弄ふやうに、寝顔の頬に、觸れて摩つた。

「殿」

けれども、泥酔と、疲労からの熟睡とが、意識を眞黒く昏濁させたものと見えて、信光は目覺めな

かつた。すこしばかり、口元をもぐ／＼させたのみである。

(おゝ、これなら！)

心配無いと思つた刈葉は、にんまりと魔性の笑を、洩らし泛べた。

(ほんの、ひと思ひに……)

淫婦らしく身體をくねらせて、蚊帳からすべり出ると、すーうツと鬨を越えて、入側へ這入つて、幾之進の肩へ、手を遣つた。

(三)

女の手が肩にかゝると、またも男は、胴ぶるひを覺えた。

幾之進は、身顛ひを禁じ得ないで、齒までをガタガタいはせた。

刃傷は初めての経験だった。だが、そのための戦慄であるよりも、やはり主殺しといふ觀念の前に慄へたのだ。つい今し方、あれほどぎつくばらんに自己本位に、あれくらゐ徹底的に圖太く考へたにも拘らず、いざとなれば、さすがに、慄へたのである。

「……」

「……」

蝶濱の河を渡りきるには、刈葉の方が強かつた。

幾之進は、自分の肩のところの着物を、女の手が掴んで、自分の體が前方へ、ひき出されるのを感じた。

(もはや是迄！)

遲疑と戰慄とを、かなぐり棄てた。

裾を捲くり、からげて、密通の河の流れを窺と渡るつもりなのが、さうはゆかなくなつた。姦淫の水の深さは、膝を没し、腿を越え、股を浸し、臍を、乳を、胸を、肩を、埋ませ埋ませ、たうとう全身を、頭も餘さず容没させてしまつた。すでに斯うなつては、ブラインドである。水中の盲泳きなのである。

幾之進は、刃を抜いて室内に入るが早いのか、蚊帳の乳紐を鉋子尖で切ると、蚊帳が、ふわりと半ば落ちかゝるのへ、踏み乗ると同時に、

「えゝつー」

蚊帳越しに、大刀を振り下した。叩き斬つたのである。

その瞬間に悲鳴が一聲。

「グがあアー」

といふやうに、響いた。激しい響きには違ひないが、案外高くも大きくも無かつた。幾之進は、息も繼がずに、刃を引くが否や櫛を握り替へて、信光の體に跨がると共に、眞下突きに、ありつたけの力で突き刺した。

だが今度は、悲鳴もあがらず、唯だ、

「グうゝ……」

鈍い音が、かすかに聞えたのみだ。

さらに刺つた時は、その鈍い音さへも消えてしまつた。

(仕止めた！)

さう思つた、幾之進は、引きあげた血刀を、蚊帳で拭つたので、刈葉も、

(おゝ首尾よく！)

と、胸を撫でおろした。

兇刃は、第一撃で、脳天を眉間から叩き割つて、致命傷を負はせ、二の太刀の突きで、心臓を刺し貫いて絶命させたのだ。

哀れにも信光は、まったく仰臥の姿勢を、其儘かへもせずには締切れた。ほとんど苦痛らしい苦痛な

しに死んでいつたらうから、おなじく惨殺されるなら、此方が増だつたかも知れぬが、まことに呆氣ない死方だつた。つまり泥酔と、最後の情痴と、死のやうに深い睡眠と、ほんたうの死とが、一連に連続した、ちよつと珍しいといへば珍しい死態だつたのである。

「幾之進！」

と、促すやうに刈葉が云つた。

男は、刀を懐紙で、拭き直して鞘に納めた。

「奥方！」

「さあ早う！」

女の柔かな手が、男の手頸をとらへた。引いた。

ふたりは、繋がつて、廊下へ出て行つた。

間にまぎれて、熱田へ逃げるつもりなのであつた。熱田には、刈葉の實家があつた。

(四)

死骸が人目に觸れたのは、翌る朝であつた。

那古野の城は、迎へたばかりの新主人に、惨澹たる横死を遂げられたから、噪いだ。悲しんだ。憤怒つた。

「酒卷だ、幾之進の畜生めだ」

「人非人の奥方だ」

「奥方など、呼べるツかよ、刈葉の阿魔で澤山だい」

「あきれ返つた業悪阿魔よ」

「草をわけても探し出して、姦婦姦夫を八つ裂きにせんことには、殿様の修羅の御妄執が、霧れんぞ霧れんぞ」

「草を分けるよりか突ツかけに、熱田を探すことだ」

「さうだ、熱田臭い」

人々は、熱田々々と口々に喚いた。

熱田の社家の一つ、田島肥前の家は、刈葉の生れた家なのである。肥前守は、娘の刈葉へは愛情のふかい父だつたから、たとひ怎んな罪を犯してきたにもせよ、継りつかれ、ば、突放しはせぬだらうと、さう人々は思つた。だから、叫んだ。だから、走つた。

面もふらず、熱田をさして、ツツ走つた。

矢島四郎右衛門が眞先に馬を馳せた。

小瀬、赤河、佐々、角田の面々が、後れじと駆けつゞいた。

いづれも清洲乗取りに際して、働いた人々だ。郎黨どもは徒歩で走つた。雑兵ばらも多過ぎるくらの押寄せたのである。

「やあ〜物申さうぞ、出合へ、出合へエ！」

と、矢島は喚はつた。

肥前家の表門は、閉ぢられてゐた。

「當邸にとつては刈葉殿は、娘御でもあらう。なれど我等には、不倶戴天の仇敵なり。事尋常に渡さば善し、四の五のと言葉を構へて暇どるに於いては、叩き壊して踏んごみせう。火をぶツかけて丸焼きにしよう。敵對いたさば皆殺しぞウ！」

大きな聲が、邸内へ響いた。

豫期したことながら、邸内は、どの顔も土色になつて周章へ奔めいた。

無勢に多勢、とても防げる敵ではなかつたし、逃げようにも屋敷はぐるりと取巻かれてゐる。屋敷の者どもは、今更のやうに自分らの主の無謀な、無勘定な匿まひ方を恨む氣持に苛まれた。

「のめ〜と、お匿まひなさるといふ手があるもんか！」

「どちをお踏みなすつた足だア！」

「一たい道ならん處へ突張つた悪足を、おいたはんなすつたのが間違ひだ！」

「だがその悪足を、お啣へなすつたのが御當家の、お姫様だもの因果面だ！」

「此方とらこそ泣きツ面だ！」

「泣き面どころか死づらだ！」

「おい怎うする？」

「怎うする？」

こんなことで叩き斬られたり、焼き殺されたりしては、怎うにも諦めがつかない。

しかし主の肥前守は騒がなかつた。

刈葉と幾之進が逃げ込んで來た時に、わざと匿まひ果せてみせるやうな顔をしたのは、思ふ仔細があつたからだ。探しても解る氣づかひのない穴藏があるからと、さう偽つて、引き留めておいたのだ。

もし刈葉の命を、助けたい心なら、那古野の城から追手の來ない前に、いづれへなりとも、逃がしてやるべきであつた。

もちろん、逃がして遣つても、遁れられないかも知れぬが、しかし、この邸内に置くよりも、はる

かに安全だつたにちがひないのに、それを逃がさなかつたとは？

(五)

刈葉が、

「父上の仰しやつた穴藏は、どこなので御座いますツ？」

と、さすがに、おろおろ聲で問ひたづねた。わきから幾之進も、

「その穴藏と申すのは、抜け穴道とやらへも、續いてゐるので御座りませうか？」
と、訊いた。

「む。續いてゐるから、猶更、心配無用ぢや。抜け穴道の出口はまつたく思ひもよらぬ場所なのだ」

肥前守が、さう答へると、刈葉は、

「おもひも寄らぬ場所とは？」

焦き込むことに、無理はない。表からも裏からも、関の聲が、きこえてゐるのだ。

「む。それはな」

「それは何處で御座いますの？」

「お社の拜殿のその縁の下ぢや」

と、肥前守は出鱈目に云つた。

熱田神社の社家として、加藤家、岩室家、田島家、と併び稱される此の田島肥前の邸内から、拜殿の縁の下へ、ほんたうに抜け穴が通じてゐたにしても、それは亂世のことだから、強ち、不思議ではない。

「おゝそんなら御拜殿のお縁の下へ！」

「む。もはや猶豫もなるまい。立て！」

「はい！」

「さあ穴這入りだぞ。その廊下、右へ行け」

「はい！」

「酒卷、つゞけ」

「はい！」

「突當つて、左だ」

自分も立つて、後ろから跟いて行く氣配で、刈葉と幾之進を遣り過した途端に、肥前守は、腰の長刀を抜くと見るまに袈裟がけに、



「死ねっ！」

と、浴せ斬つたのである。

「ざあーっ！」

血繁吹きが、ぱつと白い壁へ散り飛んで、幾之進がよろめく時、肥前守の刃は、つまげさまに脚を拂ひ難いだ。老年とは思へぬほどの太刀の牙えだ。

肩を深く斬られた刹那の、幾之進の叫びに仰天して、後振りむいた刈葉が、わが身を斬られたやうに悲鳴を、

「わあッ！」

と、喚いた。

喚くと同時に、本能的に逃げ出しかけたが、どう思つたのか忽ち逃げ足を、踏み止めて、

「ち、ち、父上っ！」

體をめぐらして、此時すでに仆れた幾之進の方へ、走り戻つて来るのを、

「えい不義者、不孝者っ！」

肥前守は、近寄らせて置いて、

「思ひ知れッ！」

こ、横なぐりに、幾之進の血で眞赤に染まった血刃を、わが娘の首の根へ、

(飛べっ！)

とばかりに、打込んだ。

再び繁吹く血煙の中で、刈葉は倒れた。虫の息の幾之進に折り重なるやうに倒れた。

ほつと、肥前守は息をついた。

血みどろの刃を、廊下の板に杖にして、しばし激しく呼吸したのである。

返り血で、自分の體も朱に染んでゐる。

斬つた父は、斬られた娘を、悲しげに眺めた。娘の首は、もう少しで胴から離れさうになつてゐた。むろん即死だつた。

(父の成敗は、慈悲ちやー)

瞑目すること稍暫時。

屋敷のぐるりの関の聲が、一段と大きく聞えた。

猿

(一)

「おりろウー！」

「下りろウー！」

「下馬せいッ！」

「その馬停めて、下りぬかア？」

「乗り打ちは無禮ぞ、停まれい！」

「これは守山の城主、信次殿の御川狩ぞ、下馬せずば容赦せぬぞよウー！」

若侍どもは、口々に叫びよばはつた。

喚いた若侍どもは皆、裸體だつた。

あを空から、六月二十六日といふ盛夏極暑の日光が、烈々とまぶしく川の水を、川原の砂を、岸の

泥を、そして土手の土を直射してゐた。

水の中に立つてゐる若侍もあつた。川原に尻をついてゐる若侍もあつた。だが、多くは泳いでゐた。泳いでゐる人々の間に、信次がゐたのだ。

この信次は、今は亡い信光の弟だつた。月の初旬に、酒巻之進のために暗殺された信光は、信長の唯一人きりの叔父だと前に書いておいたが、この信次が故人の弟なら、信長に對しては矢張りおなじく叔父甥の關係ではないか。

たしかに、血筋の關係では然うだ。信次は、信長の叔父に當るのである。

しかし、信次は、その生みの母の素性が、ひどく賤しかつたために、先殿信秀の末弟でありながら弟の待遇を受けることが出来なかつた。だから自然と、信長にとつても、血統は叔父でも、實際は叔父でないと同様だつた。

つい説明が、くどくなつたが、これを頭に入れて置かないことには、これから起る事件での、信次の行動が領けなくなる。

と、いふのは、もしこの信次に、殿信長の叔父たる實力があるなら、即ち叔父として認められてゐたなら、そんな行動は採らずにも済んだであらう信次だつたのである。

しかし、叔父扱ひは受けなくても、ともかく守山といふ一城の主だ。故信光が守山から那古野の城

へ轉じたその後釜に据わつたわけだから、家來どもは相當以上にも氣位が高い。で、

「無禮者つ！」

と、若侍どもが、嗚鳴つた。

松川の渡と呼ばれるこゝ龍泉寺川の畔を、笠を被つた一人の弱年者が、しごく身輕な服装で、だが馬だけは可なり見事な逸物に跨つて、悠々と乗打ちのまゝ通り過ぎたので、——彼奴め、

(どこの馬鹿野郎だ?)

と、信次の家來どもは、立腹した。

川原に尻をおろしてゐた連中が、突立つて勢み叫んだ。

「守山の殿おはずぞウ！」

「信次の殿へ、乗打ちは無禮ぞウ！」

だが、土手の上の路を行き過ぎる馬上の若者は、なぜか振り返りも、身むきもしない。

「やあ、そこな奴、豊かア？」

「盲目かア」

いかに無禮喚はりの、聲々激しく咎め立てゝも、毫しも効き目が無かつた。

どこ吹く風かとばかりに、聲々をたゞ、馬の尻にのみ聞かせて遠ざからうとする。

(ちえつ奇怪だ、どうするか見る！)

若侍のひとり、須賀才藏が、川原の草の上においた弓を、押取るが否や矢をつがへて、よつ引いて放すと、

びゅ、びゅーん——

と、其矢は誤たず、乗打つ若者の背中に迫つた。

(呀っ！)

馬上の若者は、躲さうとした。

(二)

躲したのが却てわるかつた。躲さなかつたら、矢、は肩胛骨のあたりを貫いたらう。須賀才藏の強弓に、肩胛關節をやられては、もちろん重傷、鞍つぼに堪らず落馬して、昏倒ぐらゐはしたであらうし、疵が治つても片手は利かなくなつたかも知れない。けれど、即死は免れたらう。ところが、なまじ躲したために、矢は顚顚に當つた。身を縮めて、體を後ろへ、ねち曲げつゝ躲さうとして、致命の急所を、窺深に射られたのである。

鐵は、腦を刺した。

なん條、堪らう。撞つと落馬して、たちまち息が絶え、顚顚の矢疵から流れる血潮は、骸をひたし路上の土を、青草をそめた。

「ざまア見る！」

須賀才藏は、からツからと笑つた。

禪ひとつの若侍どもが、數人も、土手へ、落馬した方へ走つて行つた。そして甚だ呆氣なく命を落した若者のぐるりを、取り圍んだ。

「おや／＼至極あつさりと、こりや御陀佛のやうだぞ。な！」

「なるほど、息が通はん」

「脈が消えてる」

「死んだとなると少し、可哀相みたいだの」

「なにが可哀相かよ。小生意氣の宜い見せしめだ」

すると突如、一人が、

「やあや大變だ、たゝゝ大變だ、大事だア！」

と叫んだ。

「てへエ馬鹿野郎め、な、何が大変なんだ？」

「ほんたうに狂印聲を出しをつて喫驚するぢあないか、氣を附けるやい」

だが、大事だアと喚いた侍は眞ッ青い顔を、死骸の顔へ近づけて、横から見たり、縦から眺めたりしてから、ふたゝび叫んだ。

「大事だア」

その侍は、朋輩には構はずに走り出した。

「才藏ウ！ 逸まつたぞヲ！」

川原へ向けて、轉ぶやうに駆け戻りながら、

「い、い、射殺したのは、才藏ヲ。喜、喜、喜六郎様だ、末森の、末森の弟君だぞヲ！」

と、喚き立てた。

まつたく狂氣じみた聲で、喚はり知らせたのである。これを聞いた當の才藏は無ろんのこと、他の侍どもも皆、さつと顔色を失つた。

「えゝつ喜六郎様を！」

愕然となつたのは道理——織田喜六郎秀孝は、殿信長とも勘十郎信行とも同腹の嫡弟ではないか。

信長に弟たちは多いけれど、母土田の方の腹を痛めた弟は、勘十郎に喜六郎ふたりきりだ。そ

の喜六郎を今、才藏が、よつ引き放した矢で、射殺してしまつたといふのだから、侍どもばかりか、主の信次は寧ろ誰よりも蒼くなつた。

泳ぎをやめて、淺瀬に立ちすくんだまゝ、なにか叫ぼうにも殆ど聲が出ない。

（しまつた！ 失錯つた！）

全身が、急にブル／＼顫へた。まるで瘧病みのやうに顫へた。眞夏の太陽の熱さへが、冷たく感じられた。いはんや川の水は、さながら氷の如くで、波は刃物みたいに痛く觸る。

（怎うする？ 怎うなる？）

横死をとげた喜六郎は、勘十郎に愛されてゐたから、信長には疎まれてゐた。これは、信長に疎まれたから勘十郎に愛された、とも云へる。だが、今、信次はまづ第一に、信長を怖れた。それから勘十郎を怖れた。どちらをも怖れたのだ。

（さあ困つた！ 何と申譯をする？）

(三)

信長は、清洲の城に移つてゐた。

彦五郎信友の亡びた時、館の一部分は焼けたのであるが、そんなことには頓着なしに、さつきと古渡から引越してしまつた。

迅いといふ點では、いかに眞似ても眞似の出来ない速さ、それが信長の特徴のひとつだ。清洲の城内に流れた血がまだ乾かず、死骸の取片附もすまぬうちに移轉ときたから、家來どもは驚いた。父談りの古渡から清洲へ移ることを、たゞ獨り決めにきめて、誰にも相談しなかつた信長だつた。だから家來どもの狼狽は、輪に輪をかけた。猫ひとつ持つて行けば濟むのなら兎も角、女房子供、一家眷族をひきつれ、家財道具をのこらず搬ぶのだ。並大抵の厄介ではないのだ。しかも待ても暫しも利かないから謂はゞ、大地震と大火事とが、一時にきたやうな騒ぎだ。

焼けた部分や壊れた箇所、繕ひ。それに改造、改築。建て増やら新規建て。

「驚きましたね」

と、草履取の藤吉が云つた。

信長は莞りとして、

「猿も、驚くのか人並に？」

「驚きますね」

「ふゝゝ左様か」

「實に驚きましたよ」

「訝しな奴だ。何を驚いたのだ？」

「まつたく恐れ入りましたね」

「ほう猿を、何が恐れ入らせた？」

「ほんたうに、べちやんこです」

「べちやんこ？ はッは！ 猿めをべちやんこに、誰かしたのか？」

「はい、お殿様がです」

「俺がか？」

「貴方が。はい」

「その面と、その體が、此上べちやんこになつたらどうなる？」

信長は、さも面白さうに尋ねた。

藤吉は、猿といふ渾名の素の猿面を、ひと際くしゃくしゃに皺めて、

「もつと勵みます」

さう、答へて、べこんとお辭儀をした。

「勵むとは？」

「お勤めをです」

「猿。そちが、べちやんこになつた爲に、そちが勤めを勤むと申すのか？」

「訝しいですか？」

と、藤吉が訊き返した。

縁先の沓脱の下に、ちよこなんと地べたに坐つて、両手を沓脱の石の上においた恰好は、草履取にしても神妙すぎるくらゐ神妙だが、口の利き方は莫迦に粗略だつた。とても草履取が君侯に對して用ふべき、言葉づかひではなかつた。どんなに賤しい出身にせよ、よつほどの愚鈍か白痴でない限り、いゝ言葉を知らぬ筈もなし、丁寧な詞使ひの出来ない譯もあるまいに、これはまたどうしたことか、動作とは全て頓珍漢の輕率さだ。お殿様とは云ふが、喋舌る文句の語尾が、成つてゐない。

だが信長には、何よりも、そこが氣に入つたらしいのである。成つてゐない、その頓珍漢ぶりが、好ましいのだ。臆面もなく、訝しいですか？ などとやるところが宜い。面白い、と信長は思ふのだつた。

「すこし訝しいよ、猿」

さう云ふと、

「一向訝しくはないのですけれど、變に聞えますか知ら？」

「聞えるとも。一體何を驚いたり、恐れ入つたりしたのか、それを聞かんことにはな」

信長は、また微笑して、顎を撫でた。

——柱に靠れ、入側の闕に腰かけて、片足は縁におろしてゐる。

(四)

燭の光が、信長の影繪を縁側の板に描いてゐる。顎を撫でながら、はだけた内懐へ、漆塗りの藪卓團扇で、風を入れた。

「おれの怎處に、猿は恐れ入れたのだ？」

灯の加減であらう。猿面は晝間見るよりも一段それらしく、緒茶氣て見えた。

「喜六郎様のお命が、ひよんなことになつたばかりか、守山様はどこへかお逃げなさるし、末森様の御軍勢が繰出して、守山の御城下に火をかけて、只今さかんに焼きたてゝゐるといふ事が、お耳に這入つても、お殿様は平氣の平左だ。ちいつと失禮な譬かも知れませんが、蛙の面に小便です。實に恐れ入つたです」

「うツはツはー」

と、信長は大きな口をあいて笑つてから、

「ちいつと位かよ猿、すば思ひ切つた無禮を吐いたものだ。この俺の面に小便をひツかける氣か？」

「とんでも無いです。蛙の面です。蛙の面にです」

「猿の面と云へ。猿の面に小便といふことにせい。そちで無くば、酷ツビどい目に逢はすのだ」

「いゝえ、どうぞ御遠慮なく、猿めを、おこツビどく」

「戯けめ、信長が遠慮するか？」

「ですから御遠慮なく、御存分に、おこツビどく！」

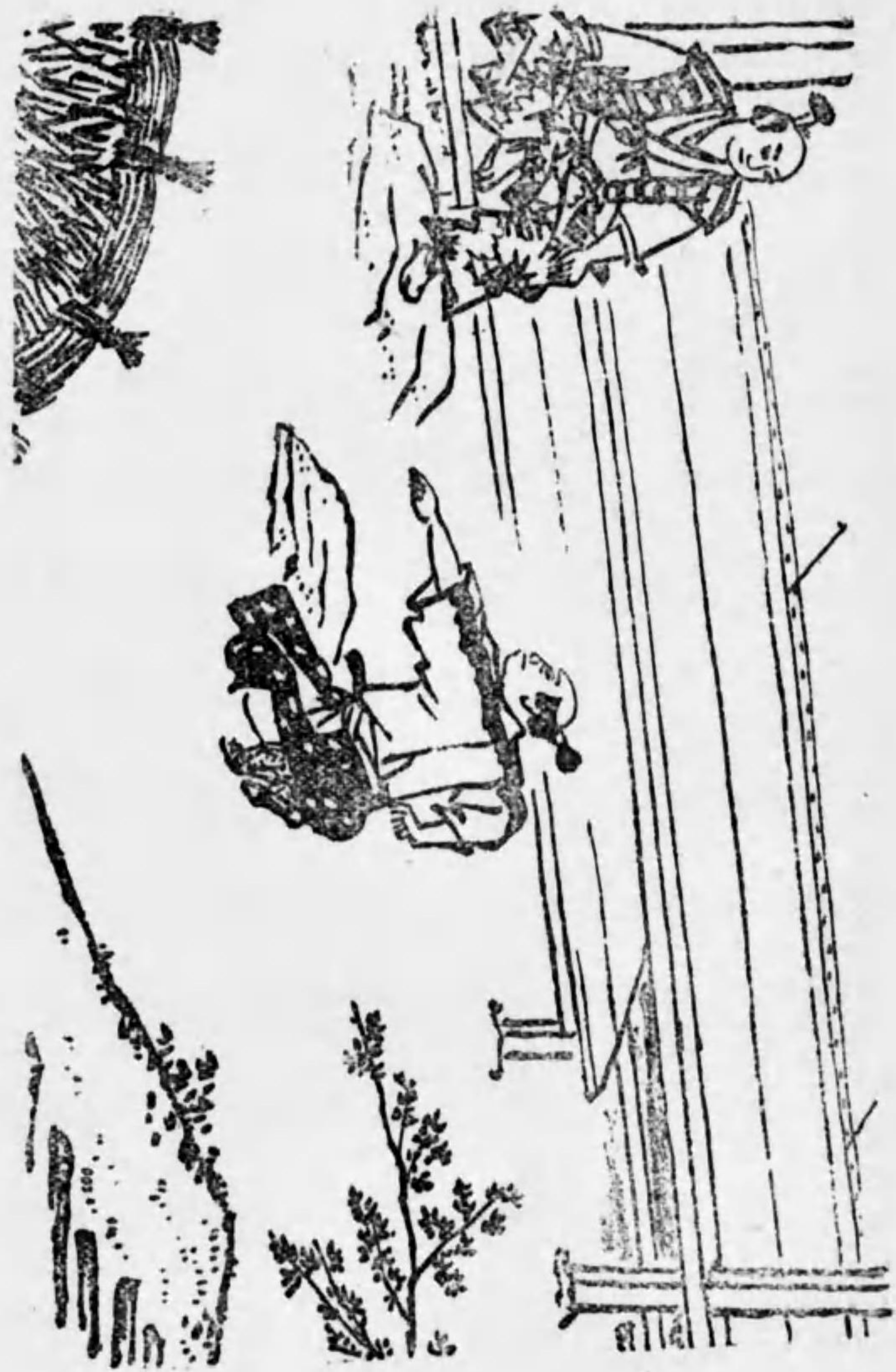
「む。小びの癖に、太い度胸だ」

「體のわりには、氣は太いのです。物心ついてから、さう喫驚するやうな事なかつた猿めですが、それが真から喫驚して、恐入つて、こんなお殿様は、日本ちうにおふたりとは無からうと、思つちまつたのです」

「いやに稱めるの」

「日本ちうは愚か、唐天竺までも、黒鐵の草鞋の磨り切れるまで、探しましても有りますまい、屹度ありません」

「世辭を使つても、菓子はお呉れぬぞ」



「お菓子には欲しくありません。けれど、お世辭やお追従では御座いません」

「御座いませんは猿らしくないな」

「猿らしくなくても、御座いません」

「はッは、今川義元よりも、傑くなれさうかの？」

「なれさうどころでは御座いません。すでに遙かにお豪いです。今川様も、するぶん勝れた御方だと、猿は思ひます。あれで、あゝまで高ぶつたり、勿體ぶつたりならなければ、もつとお偉いのでせうが、お齒黒をつけたり、白い粉をお面へ、なすくツたりしておいでなさうで、下司下郎の分際では、拜むことも中々出来ないのです」

「そちは、駿府へ行つたことがあるのか？」

「はい度々、松下殿の供をして。参りました」

「やはり草履取で参つたのか？」

「ちがひます。松下殿輩の草履など取るものですか。濱松では、立派な士分でございますよ」

「嘘つけ」

「立派な嘘ですけど、とにかく士分の端くれみたいだつた事は、本當です。なにしろ槍術が物を申しましてな」

「なに、槍術？ 猿に槍の心得があるのか？」

「有るの無いのと申す段ではないです」

「それは初耳だな」

「能ある鷹は、爪を隠しますで」

「爪が、有りさうにも見えんがの」

「なにぶんにも新參の御草履取ですから、隠してゐる爪が現はれません」

「どうも眉唾らしいぞ、わはッはッは！」

信長は、愉快さうに笑ふのだつた。

(五)

「御不審なら、猿めの手並、お目に懸けても苦しい御座いません」

「苦しい無い？ ほッは、言葉の使ひ場所を辨へない奴だ」

「槍の使ひ場所ならば、辨へてゐます」

藤吉は、頬骨の突張つた赤ら顔を突きだして、さう答へてから、

「はい、槍ならばです、三間三尺柄の長槍でも、六尺柄の短槍でも、自由自在に使ひまして、あまつさへ、はい、規ひの確かさは、美濃は稲葉山の館、道三公のお若かつた時分の油たらしにも、まさるとも劣らぬほどの手練なのです。嘘と思召すなら、試して御覧なさいです」

「つべこべと、口の減らん奴だ」
信長は、藤吉の槍の手並などは、どうでもよかつたのである。自慢の正體が、嘘でも本當でも、構はないのだ。

信長には、武藝そのもの、興味は、はなはだ乏しかつた。そのくせ武藝百般、何でも勝れてゐたのであつたが、たとへば馬術でも、弓でも、鐵砲でも、術の巧緻とか、蘊奥とかは他人事だつた。だから、藤吉に三間三尺の槍の至藝が、眞實にあらうと無からうと、それを詮索する氣など起らう筈がない。たゞ、「口の減らぬ奴」と、印象を深めただけだ。

「猿」

「はい」

「そちの年齢は、十五くらゐとも見えるし、また、卅くらゐにも見えんこともないが、一體いくつなのだ？」

信長はまだ藤吉の年齢を、聞いてゐなかつたのである。

「お殿様は、御存知なかつたのですか？」

「知らんよ」

「二十二歳と六箇月くらゐに申上げたのですが、お生憎ともう少々若いのです」

藤吉の表情は、笑ふのか、怒るのか、それとも並の相好なのか、鳥渡區別が附きかねる。

「ふー」

暢氣さうでも敏感な信長は、苦笑して、

「十五と三十の丁度まん中なら、二十二歳六箇月だが、下らない勘定をしたものだ」

「勘定は大切ですからな。無勘定が猶さら大切なこともありませうけど」

「猿」

「はい」

「坊主の寝語みたいな文句を、どこで聞き習ひつた？」

「いゝえ、聞きかじつたのではないです。猿が、さう思ふのです」

「さうか。猿の考へか。猿智慧といふ奴だな」

信長は、口ではさう云つたものゝ、無勘定が猶更大切なことあらうが氣に入つて、ますます好ましきを感じた。

「猿」

「はい」

「おれの年は、正確に云へば、二十一歳と六箇月だが、そちは、おれよりも年上か、それとも若いのか？」

「喜んで頂けさうです」

「なに？」

「お殿様は、齢の多い人間をお嫌ひなやうですから」

「そんなら猿は、信長より若いのかな」

「どうやら若さうです」

「若さうですは變な云ひ方だな。若いのか？」

「若いらしいです」

「らしい？ 信長は天文三年正月二日生れた。なら明瞭、そちも云へるだらう」

藤吉の返辭を待つと、

「はい。明瞭、若いらしいです」

(六)

「こら猿つ、自分の齢を、らしいといふ事があるか？」

「あります。こゝに御座います」

と、藤吉は事も無げに答へて、

「この猿めは、今年は數へ年が二十、といふことになるのですけれど、怎うかと思ひます。天文五年の正月の朔日に、おぎやゝあつと産聲をあげたといふのですが、あてになりません」

「ふゝむ正月の朔日に生れたのか」

「初日出と一しよに生れたと、さう聞かされましたが、これこそ眉唾ですよ」

「ほう初日出と一緒か」

「全く、怎うかと思はれます」

「目出度い猿だな」

「決して、不芽出度くは御座いません。中村の水呑百姓の小伴が、かうしてお殿様の、お草履を取らせて頂くのは、ほんたうに仕合せです。黒鐵草鞋で唐天竺まで捜しても無いお殿様です。はい、まこ

とにお有り難いのです」

藤吉は、胸で結んだ結び目を解いて、背中に擔つた風呂敷包みをおろして、膝の上で披けた。中には、信長の靴と、草履とが、一足づゝ這入つてゐた。

それを、うやくしく藤吉は押戴いた。

信長が、

(どこまでも頓珍漢に出来てゐる！)

と、思つた時、小姓の十阿彌が、戸口から現はれて、蚊遣の側まで来て手をついた。

華やかな衣裳をきた、あでやかな色若衆だ。

たしかに稀な美貌である。

白粉も、口紅も、つけてはゐないのだが、生地の白皙と丹花を欺く朱唇とは、粧つた美女よりも嬌やかなのである。

「十阿彌。なにか用か？」

信長は、十阿彌の性質が伶俐で、何事も能く出来るから側近に使つてゐるのであつて、容貌や家柄のためからの小姓ではなかつた。だが然し、嬌やかなものに故意と目を反けるやうな、そんな信長ではないし、また家來の家柄を、理由なく無視もしない。

十阿彌は、重臣の愛智の家の後とりで、すでに父親の亡い子だつた。そして母にも死に別れてゐた。

その點に信長の惘然が懸つた。のみならず其の美貌にも、數年來、心はひかれてゐたのであつた。

「重役どもの、催促だらう」

「いゝえ、御重役衆は、諦めてをられまする」

「諦めてゐる？」

「はい。お表お廣間へは、お出まし無きものと、さう諦めてをられまする」

「たいぶ賢くなつたな」

「御仕込みの所爲で御座りませう」

「よけいな事を云はずに、用があるなら申せ」

「お報告に参りました。守山では、つひに戦が始まつたと申しまする」

「それだけか？」

「はい」

「攻められれば、防ぐのは當りませう。今夜は怎うならうと、打捨つて置くのだ」

「は。では退りまする」

十阿彌が、立ち去ると、

「猿」

「はい」

藤吉は、靴と草履をくるんで、包みを背中につけたところだった。

「そらは、今川の領内にゐた間に、何を一番感心したかな？」

信長が、さう訊くと、藤吉は、

「はい、それは竹千代様です」

と、即座に答へた。

(七)

竹千代の名を聞くと、信長の表情には、明らかなる變化が見えた。

「ほう、竹千代を？」

「はい、竹千代様です。去年のお正月、かぞへ年の十三で——十三ですよ、たつた十三で元服と嫁取をですよ、一しよ一べんになすつて松平元康。元康の元は、今川義元公の元です、はい。人質と申しましても、びんからきりまで色々ございませうけど、あれなどは、はい。竹千代様となると、びん

のびんの別誂への極上びんで、十三ぼつちで貰つた花嫁様は、なんと駿府の館のお姫さまです。義元公の姪御さまで、御養女で、お年は三五の櫻花、まだ十六夜はぬ書の色香は、いふにいはいぬ別嬪なんで御座いますよ。ですから實にびんくで」

「猿。びんびんとは何だ？」

「びんくとは、びんと、びんで」

「なんの事だと訊いてゐるのだ」

「花嫁様が極上びんで、御新造様が別嬪ですから、びんとびんで」

「はッは、愚にもつかん」

「馬鹿ッ早いのは、お嫁取だけちあないんで、あッといふ間もなしにお仕込みが済んぢやいまして、岩田帯、お早ばやと、その年内もさうは押詰まらぬ十月に、もう御初産で珠のやうなお姫さまで女のお子です」

「戯氣め、姫は女の子に定つてゐる」

「おどろきましたね」

「早いのに感心したのか？」

「漢語で申すと、早婚早産といふ奴で」

「不似合なことを云ふな。早産といふのは月足らずで産まれることだ」

「いゝえ、月足らずの子の方は、早産の産が、ざんと濁ります」

「猿は文字が讀めるのか？」

「假名ならば、讀み書き自在です」

「わはッはッは！ 假名の他は聞き學といふのだらう。なんとも訝しな生物だよ」

「セイブツ……は、生き物ですか？」

「ふーむ満更の無學でもなささうだ」

「さう見えますか？」

「竹千代は、さぞ成人したらうの、汝が見たのは何時だ？」

信長は、何をさせても何を云はせても、人並よりは一風も二風も異ふ草履取に、好奇心を動かしながらも、遠く駿河の府中に住む竹千代へ、たまらなく懐しい想ひを馳せすにはゐられなかつた。

隣國の形勢には、絶えず心を留めてゐる信長だつた。こゝ尾張からは、三河の國と遠江の國、國二つ隔てた彼方の駿河は遠い。しかし駿、遠、參の三箇國は、今川氏の領土だから、駿河は遠くても謂はば隣なのである。

してみれば、駿府に人質暮しをしてゐる竹千代の動靜が、かなり詳しく、信長にわかつてゐたこと



竹千代

は、勿論だつた。

いま草履取の藤吉から聞くまでもなく、信長は知つてゐたのだ。

竹千代が去年十三で、元康になり、わかき夫になり、わかき父になつたことは、ふかく信長の脳裡に刻みつけられてゐたのだつた。

「お殿様」

と、藤吉が呼びかけた。

信長が、ちよいと思案顔でゐたからである。げんざいの竹千代の心境は、果して怎うあらうか？ それを考へてゐたのだ。

「なんだ？」

「おや、お尋ねになつたでは御座いせんか」

「あゝさうか。竹千代を見たのは、何時だ？」

「はい、見たと申しても」

藤吉は、べこりと頭を下げた。

(八)

「見たと云つても？」

「餘所ながらです」

と、藤吉はまたお辭儀をした。

信長は、すこし揶つたさうな笑みを含んで、

「餘所ながらは、断らなくても解つてゐる」

「はい、餘所ながらですが度たびです、見たことはですよ」

「そんなに度々か？」

「駿府へ行つて、お逢ひ出来なかつたといふことは、まあ無かつたやうですね」

「汝が行くのを、窃と待つてゐたのか知れんぞ、はッはゝゝ」

「ほんたうに、さう思はれるくらゐでした」

「こ奴、するぶん背負つてゐるぞよ」

「はい、お靴とお草履を背負つてゐます」

「駿府へは、何を背負つて行つた？」

「あちらへは、槍一筋」

「天秤棒ではなかつたか？」

「最初は針です。木綿針で御座いましたよ」

「ふむ、木綿針を。針は嵩ばらんな」

「嵩のわりには重いです。もつとも重いほどは背負ひませんでしたけれど」

「商ひに行つたと見える。賣れたか？」

「賣れましたとも、針に羽が生えて飛ぶくらゐ。はい、嘘は申しません。齋藤道三公のお若い時の、荏胡麻油ほども賣れました」

「おのれ、よく稲葉山を引合ひに出す。さつきは槍で、こんどは油を持つてきたが、齋藤道三は、おれの妻の親父だぞよ頓痴奇め」

「それはもう、餓鬼の時分から存じてゐますので」

「猿は、駄目だよ」

「え？ 駄目とは？」

「諦める、見込みが無いから」

「心細いな。駄目でせうか？」

「とても道三のやうな大悪黨には、なれっこないぞ、わはッはッ！」

「お殿様！」

「なんだ？」

「悪を一切抜きにした道三公に、猿めは肖かりたいのです」

「その心懸けは悪くないな」

「道三公のお悪黨ぶりまで真似る氣なら、猿は、今川館へ奉公しますよ。折角あちらで士分になれたのですもの、なにも好き好んで、こちら様へ参る筈はないのです」

「だが、土岐と今川では、大きな相違だ」

「しかし、こちら様と今川屋形ほどは違ひません」

「今川の領地は、織田の十倍も広いぞ」

「でもやがて此方様の御領分の方が、何層倍廣くなるか知れませんが」

「菓子は遣らんといつて置いた」

「いゝえ、お菓子どころか、お草履だけで背中も、お腹も、一ぱいです」

藤吉は、さう答へて腹を叩いた。

「猿」

「はい」

「肝腎な竹千代の話が、立消えたではないか」

「どうも相済みません」

「詫らなくてもいい」

「頃は天文十九年、若緑が美しく、駿府は安倍川の畔に薫るやうな、まあそんな日で御座いました、木綿針を背負った猿め、おもはず目を見張ったのです」

「初めて竹千代を見たとき、云ふのか？」

「はい」

「十九年といふと——俺と別れた翌年だから、竹千代は九つだ。何をしてゐた？」

「石合戦です」

「む、石合戦か」

「とても屈竟な御家來の、肩車に乗つて、石合戦の下知をしておいでなのです」

(九)

「ふうむ、石打の宰領か」

信長が、さういふと、

「否え、石合戦の下知です」

藤吉は訂正したのである。

「おんなじことだ。石打を知らんのか馬鹿野郎めが」

「知らなくても恥ではありません、そんな古臭い言葉などはです。穢の生えたのは、お殿様だつて、お好きぢやないくせに」

「癖にだど？ はつは、まあ好い。その石合戦は、竹千代の小姓どもが演つたのか？」

「否え、ちがひます。今川屋形の御家中の少年衆が兩手に分かれて、一方は三百人ばかり、もう一方はその三分一の百人ほどで、安倍川原せましとばかりに、石投で、戦の模擬を演つたのです」

「これ戦ごつこと何故いはん？」

「模擬は不可ませんか？」

「聞き學にしては、難かしい言葉を知つてゐるな」

「模倣は決して、徹臭くはない積りです」

「能書は並べずともいふ。——石打の餓鬼四百人とは、集まつたもののだ」

「さすがに、御大家ですよ」

「竹千代は餓鬼大將といふわけか」

いくつになつても信長は、相變はらず口が悪かつた。藤吉も無ろん宜い方ではなく、時には思ひきり生け粗末だが、その點、信長に文句の有り様がない筈だ。事實、信長は、時たま此の草履取の言葉使の粗末さを、口咎めはしたけれども、心では毫しも咎めだてる氣が無かつた。

「はい。竹千代様は餓鬼大將でした。しかし、少數方の、百人ほどの餓鬼大將なのです」

「小勢の方を指揮して、大勢を負かしたといふのか？」

「はい。あとで聞いた話ですけど、竹千代様は、わざと小勢の方の下知を、御自分から買つて出なすつたのです」

「竹千代としては當前だ」

「へえ？ 當然でせうか？」

藤吉は、稍半分も解せない顔で、

「百人が謂はゞ、竹千代様の手足みたいに動いて、三百人の方が形無しに、べちやんこに成つたのです。それでも當然でせうか？」

不服らしくいふと、

「當前とも。當然すぎるのだ」

と、答へて、信長は微笑した。

この微笑は、藤吉の腑に落ちなかつた。

(はてな？)

猿面を、ぐいと傾げたのである。

じつに目から鼻へ抜けるといふ比喩が、譬ひ負けするほど伶俐い藤吉は、滅多に首を傾げるなど、いふ事が無かつた。それが今、うんと傾げたのだが、どうも解せない。

(なぜ當前すぎるのだらう？)

藤吉の疑問こそは當然だつた。と、いふのは——

愛知郡中村の土百姓——百姓にも由緒のある者も少くないけれど、これは系圖ひとつ持たない水呑百姓の子に生まれた藤吉は、十五歳まで尾張に育つたとはいふものゝ、尾張へ人質に来てゐた竹千代と、信長とが、どんな間柄であつたか、おぼろげな輪郭さへも知らずに過ごした。たゞ眞裸で、裸馬

を、無闇と乗り廻す信長だけを、はるかに眺めて、はたの噂どほり狐馬の呆氣殿様だと、さう思つた。で、身を立てるには今川家の領分に限ると考へて、木綿針を背負つて尾張の國を出たのだが、三河の矢作橋の上で、盗賊の親分、蜂須賀小六に出逢つた。それから遠州を通りぬけて駿府へ行つた。そこが目ざす場所だつた。目的地について、藤吉は、まづ石合戦の竹千代に驚いたのであるが、その時の感じは、五年後の今も一向、薄れてはゐない。

(十)

ひろん、今現在の藤吉にとつては、仕ふべき唯一の殿は信長であつた。最も頼もしい人は信長だつた。最も尊敬する人は信長だつた。さればこそ、この殿の靴と草履の包を背中に括りつけてゐる。

だが、石合戦を見た時は、竹千代の家來になりたいと思つたのだ。

當時、竹千代は、駿府でどんな生活をしてゐたかといふと、人質としては申分なく安樂な暮しだつた。住居は、少將宮町と呼ばれる場所にあつた。おそらく静岡停車場附近、小梳神社の境内あたりが、その古蹟であらうが、相當立派な屋敷に住んでゐたことは確かだ。なぜかといへば、岡崎から隨行してきた小姓、用人、警固役、それに雑役の者まで加へると、百人以上であつたと記録されてゐるか

らだ。竹千代に都合の宜かつたことは、母方の祖母の、玉桂慈仙といふ老尼が、おなじ駿府に住んでゐたことだ。この祖母の尼は、俗名はお萬の方といつた女で、大河内元綱の娘だが、水野忠政に嫁いで竹千代の母を産んだのであつた。華陽菴といふ菴寺を建てゝゐて、愛孫の竹千代のために、いろいろ面倒を見たわけだ。菴の住持は、智短といふ僧侶で、これが誠心をこめて、竹千代の教育に骨を折つた。のみならず、賤機山の後の巨利、臨濟寺の雪齋長老からも、竹千代は學ぶことが出来た。昭和の今日でも「竹千代手習の間」といふのが、臨濟寺に遺つてゐる。雪齋長老は、禪僧として偉かつたばかりでなく、今川家の軍師としても聞えてゐた。それが竹千代を、手鹽にかけて教へ込んだのだから、この人質生活は、かなり恵まれてゐたともいへる。

いふまでもなく、さうした竹千代の環境については、駿府で見てきた藤吉よりも、尾張にゐる信長の方が、すつと詳しく知つてゐるが、石合戦の實況となると、藤吉から信長は初めて聞くのだった。で、藤吉は、

(はて、なぜだらう?)

と、考へてみたけれども、「當前すぎる」といつた信長の微笑が、なんとしても解しかねた。だから、

(自分の話方が足りないのだ)

さう思つて、竹千代の指揮ぶりが決して、尋常一様の傑れ様でなかつたといふことを、長ながと述べ立てた。

「九つのお子ですよ、はい。一體どういふ譯で當前——すぎるのですか？」
すこし息巻氣味に、伺ひを立てたのであるが、信長は、返事の代はりに岐阜團扇を、ばたくさせただのみで、黙つてゐた。

しばらくして、

「瀬名姫といふ女は、美しい女か？」

と、信長は訊ねた。

いきなり飛躍的に質問を、ぶつつけるのが信長の癖だ。——瀬名姫といふのは、竹千代の若妻の名であつた。

「はい。とても美しいといふ評判です」

と、藤吉が答へた。

「そちは見たことは無いのか？」

「噂に聞いただけです」

「若夫婦の仲が、いゝとか悪いとかいふ噂は怎うだ？ 竹千代は氣に入つてゐるらしいかの？」

「それはもう、お氣に入りに違ひありませんよ。その證據には、あんなに早々とお子が出来たです」

「馬鹿野郎。そんなことが證據になるかよ」

「それは、なりますとも！」

と、猿面が顎を突きだした。

(十一)

「ならんよ」

「なりますとも！」

「ならん！」

「なりますッ！」

「馬鹿ッ！」

と、信長は大喝した。

「馬鹿でも證據は、證據ですッ！」

と、藤吉も、大きな聲を出した時、しづかに縁側に現れたのは、濃姫夫人だつた。

信長が、

「證據にはならんと申すに、解らん奴だツ」

嗚呼した聲は、眞實に怒つてゐるやうに聞えたので、濃姫夫人は、

「まあ、猿やが何か、不調法でも？」

と、媚かに小首を曲げた。

「不調法ではないが、此奴、案外石頭だよ、わはッはッは！」

夫が可笑しさに笑つたので、夫人も直ぐ笑顔になつて、

「あらま左様で御座いますか」

「左様だよ。だいぶ伶俐さうに押ツ通して來た猿めも、つひに猿脚を露はしたぞ」

藤吉が、

「え？ エンキヤク？」

と、目をきよろつかせた。

「馬脚を露はすと云ふではないか。猿脚は、猿の脚よ」

エンキヤクは、濃姫にも解らなかつたので、ちよいと擧めた眉を、嬌やかに開いて、

「おほほほ、お猿のお尻は赤いと申しまする」

と、云つた。

「どうも恐れ入ります」

藤吉が、頭を下げると、

「どうお爲なのよ？」

「へえ」

信長が、

「猿は女を知らんな」

さう云ふと、顔を擡げて、

「否え、知つてゐます」

「男女の道のことだぞ」

「はい、とうに存じてをりますよ」

「嘘つけ。知つてゐるなら、子の産まれることが愛情の證據だなどと、莫迦は言はん。言ふものか」

「でも、知つてゐることは、神佛も照覽あれ、慥です。うそ偽りでは御座いません」

「おほほほ！」

濃姫は袖を、口に當てた。

「女も、いろ／＼経験したです。蜂須賀の子分になつてゐた其の間に、物を盗むことは覚えませんが、女の味は覚えられましたですよ。はい、それを手初めに、皮切りにすな、松下殿に奉公中に、女子の数を重ねましたです」

「猿。それほど知つてゐるなら、猶更あげた手こ變だぞ」と、信長が云つた。

だが、藤吉は仰山に首を振つて、

「但しですね、女子と申しましても怎の道、猿のお相手ですから、女と名の附くか附かぬか、ごく際どい代物で御座いましたな」

「おほほほー」

濃姫は、堪らなさうに笑つた。

信長は、相好をくづして、

「猿の愛情が、移らなかつたといふのか？」

「はい。たゞ生温かい石を抱いたやうなもので」

「ふん／＼／＼」

「面白くも可笑しくもないものですから、もう當分は、ふつつりと思ひきります」

「なんのお話だつたので御座いますの？」

さう、濃姫が訊くと、

「駿府の、竹千代のことよ。猿は中々、詳しいのだ」

と、信長が答へた。

(十二)

「あら、そんなに詳しいので御座いますか」

「はい、實に詳しいのです」

藤吉は、信長に代つて返辭をして、

「まったく竹千代様のことならば、たとへばですね、風をお引きになつた時は、何べん嚏をなすつて幾つ咳をなすつたかまでもですね、残る限なく存じてゐます」

思ひきつた大風呂敷をひろげて、臆面なしの自分宣傳をやると、濃姫は、またも顔の半ばを、袖にうづめて、

「まあ面白い猿やですことー」

と、笑ひこけたが、信長は稍眞顔になつて、

「竹千代は時々、風邪で寝込むやうなことでもあるのか？」
と、訊いた。

そんな弱い體質ではない筈だがと、思つたからである。

「ところが、お生憎と、てんで風の神が傍へも寄りつけない程、お達者なんで、嚏ひとつ、咳半分、つひぞなすつた事が無いから、憎らしい程お丈夫なのです」

「おのれ、ちよいと心配をさせをつたぞ」

たちまち、信長の笑顔が戻つた。

「ほう？」

と、藤吉は目を丸くして、

「そんならお殿様は、今川屋形の若婚殿のお身體が、そんなに健かな方がお氣に召すのですか？ すゝゝおふん變はつてらつしやる」

「ふ、變はつてるのは猿だよ。おのれの奇態奇手烈を、どの棚に上げるのだ」

「しかしですね、竹千代様は、尾張のお國にとつては、末怖ろしい敵で御座いませう」

藤吉には、竹千代の健かなのを悦ぶ信長の心理が、わからなかつた。だが然し、これは解らないの

が當然だつた。

信長が、なにか云はうとした時、濃姫は、

「あの……ちよつと」

と、遮つて、

「申上げます。又お叱りかも知れませぬけれど」

「例によつて重役どもが、出陣して呉れと、せがむのだらう？」
顧みると、

「いゝえ、重役たちも、おほかた觀念したと見えまして、御出馬を願ふとは申しませぬが、せめて相當な人数だけは差向けて、守山の城を救はないことには、清洲乗取に働かせた義理が済まぬゆゑ、それだけはお許されをと、さう申すので御座いますの。いかゞ遊ばします」

濃姫夫人が、さう訊ねた。

「どうもせんよ俺は、打捨つて置け」

「でも、守山の城が落ちましては……」

「落ちた時は、落ちた時だ」

「——落ちてからよりも、落ちない前の方が、お宜敷くは御座いますまいか？」

「多寡の知れた寄手だもの、防げないで怎うする。うろたへて妾を侮ました信次は、話にならぬ腰抜けだが、守山の家来どもは、あれで、働ける奴等だよ。まあそんなことよりは、竹千代の噂の方が、どれほど増か知れんぞ。なあ猿」

信長は、藤吉へ向き直つた。

「左様でせうか？」

と、藤吉が云つた。

「はッは、左様だよ」

「左様ならば、斯く申す猿めが島です」

「竹千代に限るよ」

「限りますな」

「何か面白さうなのを、話して聞かせろ」

「——奥方さま。申上げてもいゝでせうか？」

藤吉は、さう云つて、濃姫夫人の顔を眺めた。

(十三)

濃姫夫人が婉然と頷くと、

「そんなら申上げますが」

と、藤吉は、無上に丁寧なお辭儀をしたかと思ふと、

「エへん！」

咳ばらひを、勿體らしく氣どつて、

「これは實に面赤いもので御座います」

と、云つた。

信長が、

「面黒いとは申すが、面赤いとは言はんぞ猿」

「申しますよ。たとへばです、わたくしの、この猿めの面の赤いのも、たしかに面赤い方で」

「え、面赤の頓痴氣めが！ 早う聞かせろ」

「大將は急ぐにあらず。未森勢が押寄せても、悠々かんくと太平樂に、猿面冠者に喋舌らせておい

「なります。そこで初めて、垂れ場所でございます」
「どこだ？」

「府中お城御本丸の、表黒書院のお縁側から、お羞かしげもなく、大人にも稀な大小便を、ジャアジ
やあ、おはじきになつたのです」

「む、やつたな！」
と、信長は、思はず大きな聲を出した。

(十四)

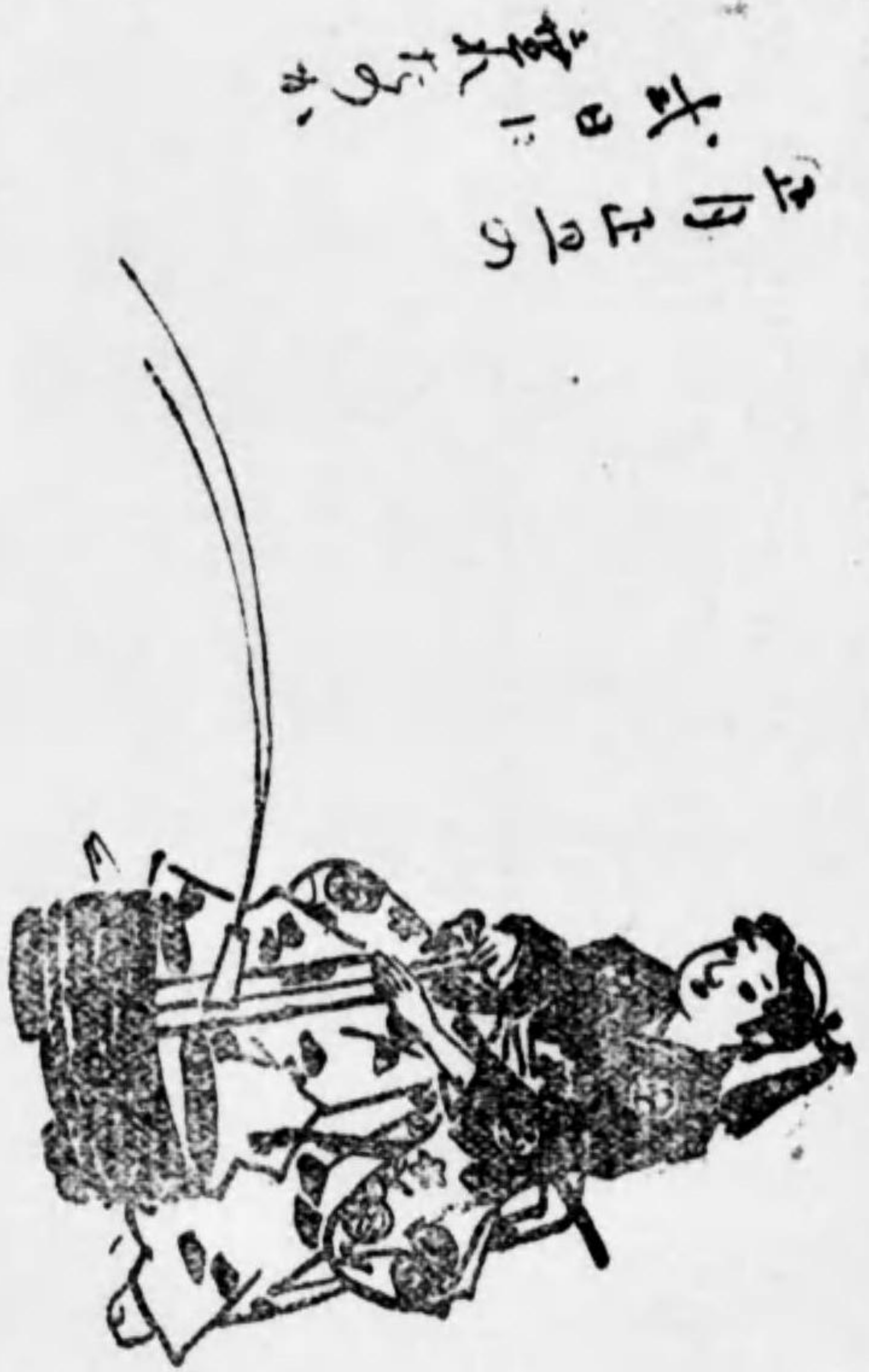
自稱、猿の冠者は、數年のうちには羽柴藤吉郎秀吉になるほどあつて、度胸骨は、すんと太ぶとし
いのだが、それがハツとした。

といふのは、信長の聲が、大き過ぎたからである。

「お殿様、びつくり致しますよ！」

だが、信長は、

「今川の、へなちよこ殿原、さぞ吃驚、しやつくら、したらうよ。わはッはッは！」



信長

と、笑つた。
わきで濃姫が、

「まあ、お氣味よきさうな！」

「いゝよ、氣味がいゝよ」

「あんなにお可愛がり遊ばしたので、妙なところまでが、竹千代殿は、貴方にお感觸れなので御座いますのねえ」

「濃姫、そなたは、さう云ふけれど、俺は富田の正徳寺で勇殿に會つた時にも、大小便は垂れなかつたぞよ」

「ホホほゝ、でもあの、お裸なりで七つお道具とやらを……」

「それは道中だよ」
「あの時は、お對面の折は、随分お立派だつたと申しますけれど、萬松寺のお抹茶づかみといふ、おはなれ業が御座いますぞえ」

「竹千代は、見てゐなかつたよ。あいつも父親に死なれて、可哀相に、しく／＼泣いてゐた時だ」

「でも、お儀式のお書院の縁側から、平氣でお小用をお足しになるなぞといふことは、どう考へてみましても、貴方のお眞似としか、思はれませぬものを」

「さう、思ひたくば、さう思ふがいゝわさ」

信長が、さも氣持よげに笑つた時、藤吉は、濃姫夫人の方へ、顎を差しむけて、

「尾籠な野郎めと、お叱りをうけるかも知れませぬけれど、奥方様がお小用などと、優しさうに被仰いますと、一向すさまじき氣色が浮かんで来ませんね」

「あら猿やが。すさまじい氣色とは？」

「竹千代様の、大小便の景色のことです」

「あアれ！」

「大層遠くまで、烈しく届いたと申します」

「まあ失禮な！」

濃姫は耳朶まで紅くなつた。

「はい失禮は」

と、藤吉は頭を下げて、

「覺悟の前です。臍とやらを固めまして、本當のことをお知らせするので。石合戦の肩車の時は、まだほんの少年の竹千代様が、わづかの間に、めつきり大きくおなりで、その大小便の時はですね、歳こそ十でも、人の十四五歳、もう可なり御躰格好も、青年らしく成長なすつてゐたのです。その證

據にはですね、去年、十三といふお歳で、竹千代様は、瀬名姫の夫となり、女のお子の父ぎみにおな
りです。で、それから推しても、猿めの申上げたことが、およそ髣髴となりませうがな」

信長は、

「はッは、髣髴は佳かつたぞ猿。——猿は中々學者だ」
と、云つた。濃姫にしても、

「おほ、う、う、まあ、いやらしい！」
笑ふほか無いのだつた。

すると、藤吉は顔を、急に上げて、

「蛇は一寸にして牛を吞みます」
と、やつた。

「おのが自慢か？」

信長が、さう訊くと、

「滅相な！ 竹千代様のことです」
と、藤吉は答へた。



昭和十六年四月廿日 第一刷印刷
昭和十六年四月廿四日 第二刷印刷

歴史小説・安土桃山
織田信長(第二卷)

〔定價 壹圓八拾錢〕

著作者 東京市淀橋區藤町六
鷺尾雨工

發行者 東京市日本橋區吳服橋二ノ五
神田龍一

印刷者 東京市牛込區矢來町三六
本間淳三郎

印刷所 東京市牛込區矢來町三六
清揚社

製本所 東京市麹町區飯田町一ノ一六
河手製本所

東京市日本橋區吳服橋二ノ五
發行所 春秋社

電話日本橋二六二四番
振替東京二四八六一番

(小社發行書籍中、落丁等の不完全品があります。
大部は御申出で下さい。早速御取替致します。)

小歴史 安土・桃山（全十二冊） 鷲尾雨工著

織田信長

名取春徳畫伯裝幀
B6判本綴美麗カバ付
各冊平均四〇〇頁
定價一冊壹圓八拾錢
（十十四錢）

安	第一卷	狐々馬
土	第二卷	人質交換
編	第三卷	桶狭間
(冊七)	第四卷	岐阜
	第五卷	足利滅亡
	第六卷	中原布武
	第七卷	本能寺

安土・桃山！それは信長、秀吉の二名將二政治家によつて近代日本が統一國家への巨歩を踏み出した最も輝かしい時代だ。雨工の逞ましい歴史眼と、鋭い氣魄の創作力とは、この時代と人とをまざまざと描き出して歴史小説の一大エポックを作つた。

織田信長既刊七、これに目下執筆中の豊臣秀吉五卷を加へて、新裝改めて信長第一冊より再發行することは、東亞共榮圈確立

春 秋 社 版

桃	第一卷	小牧陣
山	第二卷	聚落第
編	第三卷	淀殿
(冊五)	第四卷	桃山城
	第五卷	關ヶ原

の情みを憫み抜く現代日本への絶好な贈り物と確信する。

全目次が示す如く、信長の狐々馬時代から桶狭間、中原布武を経て、本能寺の悲劇に終る迄のこの英雄の全生涯、小牧陣から關ヶ原陣に至る迄の、秀吉とその一家の興廢、而もそれは正確な史實を基礎としての小説だ。

文學は斯くありてこそ、眞の文學と云へよう。

春 秋 社 版

豊臣秀吉

名取春徳畫伯裝幀
B6判本綴美麗カバ付
各冊平均四〇〇頁
定價一冊壹圓八拾錢
（十十四錢）

小歴史 安土・桃山（全十二冊） 鷲尾雨工著

吉野朝太平記

埋もれた南朝の英傑、楠正儀の孤忠を描いて、六百歳の後にその
冤を雪ぎ、楠氏三代の忠誠を全からしめた大歴史小説！

(全六卷)

著工雨尾鷲

- 第一卷 楠正行と正儀
- 第二卷 正儀策謀ノ一―師直の死
- 第三卷 直義の死―正儀の京都回復
- 第四卷 北朝三上皇の南遷
- 第五卷 再び復す帝京の地
- 第六卷 親房と尊氏逝く

古への國難を描いた本書がより大なる國
難―日本及び東亞の歴史的一大轉換に際し
崇高なる日本精神を示唆し、國民を根柢より
覺醒せしむる機縁となつたことは、偶然とは
云へその功績は頗る大きいと云はねばなら
ぬ。構想の雄渾、描寫の精緻、作の
中軸を貫くものは嚴肅な皇道精神で
あつて、讀むものは何人も此の尊嚴
の前に襟を正すであらうし、若き英
雄正儀と、老いたる准后親房の痛ま
しい悲劇の前には何人も涙を吞むで
あらう。

版社秋春

著工雨尾鷲

小説 北畠親房

B6判本綴三六八頁
定價一圓八十錢
送料 十 四 錢

日本歴史の至寶、北畠親房の神皇正統記は、
完小田城に三年間の籠城、逆賊の大軍に包圍され、
の流しに没頭され、然も此の完成を助けたもの、
の眞只中に、鮮血の情熱に燃え、死なぬ、
かうとした尊王の情熱に燃え、死なぬ、
景を花の様な美しさで映寫した所以、
な日本歴史文學……

劔豪物語

四六判美裝三二四頁
定價一圓五十錢
送料 十 四 錢

描寫の精細、氣魄の雄渾、而も劔を説いて人に徹し、人を描いて
劔を極むるところ絶對に他の追隨を許さぬ雨工の獨壇上である。

- 次目
- 宮本武藏 伊藤一刀齋 荒木又右衛門
 - 塚原卜傳 神子上典膳
 - 多藝御所 柳生宗嚴

版社秋春

著 寬 道 田 原

日本刀私談

四六判美裝 三七三頁
定價 一圓六十錢
送料 十四錢

之こそ日本刀の教科書！日本刀讀本！！日本民族の魂を日本刀の解説に託す。日本刀の歴史、製作、鑑賞、研究のすべてを網羅し、詳述し、易く、面白く、そして、正確に解説する。日本刀の歴史、製作、鑑賞、研究のすべてを網羅し、詳述し、易く、面白く、そして、正確に解説する。日本刀の歴史、製作、鑑賞、研究のすべてを網羅し、詳述し、易く、面白く、そして、正確に解説する。

大日本刀劍史

菊判特製 函入 六五〇頁
(上・中・下の三巻)
定價 各拾圓
送料 二十二錢

史の秋、水、原、道、寛、氏、は、現、代、に、於、け、る、刀、劍、史、研、究、の、一、大、高、峰、で、あ、る。大日本刀劍史の秋、水、原、道、寛、氏、は、現、代、に、於、け、る、刀、劍、史、研、究、の、一、大、高、峰、で、あ、る。大日本刀劍史の秋、水、原、道、寛、氏、は、現、代、に、於、け、る、刀、劍、史、研、究、の、一、大、高、峰、で、あ、る。

版 社 秋 春

多難な時局を突破すべし国民の意力を養ふ音楽への案内書！

賞鑑の樂音

文化映畫の如く興味ある音楽教養書

武蔵野音楽學校教授 **門馬直衛** 著

音楽の鑑賞の指導書は少くないが、門馬教授の『音楽の鑑賞』は全然獨自のものである。どんな初歩者にも判り易く、どんな音楽者にも必ず興味あるやうに出来てゐる。音楽の理論は説いてあるが、教科書風ではなくて面白い話となつてゐる。大作曲家の姿は描いてあるが、死んだ記述ではなくて活々と物語られてゐる。名曲の解説はあるが、厚くなくて読み易い。西洋音楽を取扱つてゐながら日本の音楽者も論じてゐる。全體は一貫してゐながら、どこを断片的に讀んでも面白くて要領を得てゐる。音楽美學や音楽史を織り込んでゐながら何の苦勞もなく讀める。小説のやうには讀めないにしても、文化映畫位には樂しめる。それでゐて萬國の精神から出た高度の指導性が溢れてゐる。正に全國民の爲めの音楽讀本、一億人の爲めの音楽概論、非常時突破の逞しき精神を與へる音楽への案内だ。文化人の教養書、産業戦士への慰め、國民學校の参考書、男女中等學校の讀本、青年學校の副教科書として好評噴々たる所以である。

(四六版五二八頁・上巻・樂者及寫眞)
(多数挿入・定價三圓・送料十四錢)

東京日本橋吳服橋二ノ五 **春秋社** 振替東京二四八六一

好評重版！

≡ 書選想思社秋春 ≡

エマーソンの言葉

— 思想選書刊行の辭に代へて —

あなたの小さい選ばれた図書室の中に何かあるかと云ふことを考へよ。數千年の間のあらゆる文明國から選譯し得る最も賢き人々、そして最も價値高き人々と交際し、その人々の研究と智慧との成果をあなたはよき整頓の中に知り得るであらう。その人々自身は選れて居り、近づき難く、孤獨であり、亂されることを怒り、證法に於てあなたとかけ離れて居るかも知れない。しかしその人々が、親しい友人にさへも明かさなかつたところの思想は、こゝに他の世紀の見知らぬ私達のために明瞭な言葉で書かれてある。私達は、高い智慧の行爲より出るところの最も重なる恵みを、書物から負ふものである。

フアゲ著 **讀書術** 四六判上製二二四頁 價一・三〇 千一〇

牛に汗する古典と洪水の如き新刊書をどうして讀むか。先づ佛の碩學エミール・フアゲに聽け。本書は哲學、小説、脚本、詩、評論は勿論、難解な著書、悪書をも有効に讀む技術方法を巧みに教へる。

カーライル著 **サーター・リザータス** 四六判上製四八八頁 價二・五〇 千一四

柳田 泉譯 深遠高邁な思想、冷峻にして華麗な文章、カーライルを評すればこの言葉に盡きる。哲學に志すもの及び人生哲學に興味を有つものの最高の書たる本書(衣服哲學)は、柳田譯に依つて更に全し。

≡ 書選想思社秋春 ≡

文學散步

四六判上製三六八頁 價二・〇〇 千一四

グウルモン著 本書は同じ譯者の手になる「哲學散步」と並んでグウルモンの主著の一つを爲す「文學散步」七巻の中からモリエール、シラノ、スタンダール、バルザック、ユゴ、ゾエール、サント・ブヴァー、ルナン、ボウ、ポオドレル、モリエール、アン・リ・ペエール等に関する代表的な評論隨筆三十一篇を集めたものである。アンドレ・ジイドは曰ふ。「グウルモンは繊細な趣味を備へ、萬巻の書を読んだ慧敏な文藝批評家である。彼は正當な言葉をもち、作品の正當な價値を知つて居り、慣習によつて己が選擇を支配されたり、自分の愛著の指圖を受けたりすることは斷じてない。」

憂愁の哲理

四六判上製三六〇頁 價二・〇〇 千一四

宮原晃一郎譯 本書は、キエルケゴールの纏つた著書が未だ一つも我が國に紹介されなかつた頃最初に譯出されたもので、彼の大著「あれか、これか」よりのエッセンスである。その後數年、ドイツの新哲學界にキエルケゴールの再檢討が行はれると同時に我が國でもその譯譯が盛んになり、多數の著書が公けにされた。彼の所説は唯心的傾向強く、宗教的味の濃いものであるだけに、現代の讀書界には最も適當なものであらう。而して北歐文學思想の權威として、又近代唯心的思想の先驅者として彼及びその根基を爲す本書は、更に深く研究され讀まざるべきものと思ふ。

英雄及英雄崇拜

四六判上製四九六頁 價三・〇〇 千一四

柳田 泉譯 カーライルの「英雄及英雄崇拜」——詳しくは「英雄、英雄崇拜及び歴史に於ける英雄的分子」は、我が國の讀書界に於ても、古くから餘りに有名である。本書は、語學者は云ふまでもなく一般學徒の必ず一度は目を通さねばならぬとされてゐる書物である。神の使徒、眞理の豫言者としての英雄、力と正義の福音は、本書の中心を爲す思想であるが、原文が難解なるため、その完全なる味には至難とされてゐたものである。本社はそれを遺憾として、茲に柳田氏の定本的な名譯を得て讀書界に贈る機會を得たのである。

早大教授 柳田泉編 春秋社

世界名著解題

全三卷

讀書は人生の一大事である。まして未曾有の時局下に於ては、一日と雖も讀書を怠にすることは出来ない。一億一心——國民の總力増進は、食糧のみでの解決は不可能である。そこに強靱な精神的の裏打ちがなければならぬ。精神的の強さを何によつて攝取するか。その最たるものは讀書である。しかし、古今東西に互る、幾十百萬の書籍中如何なる書を選んで讀むべきか？ 繁忙な現代人によつて、これが又一つの難關である。

世界名著解題は、この問題を解決する唯一の鍵である。本書は柳田氏が豊富な學識と藉すに長年月を以てしたる苦心の編著であり、哲學、宗教、文學、思想、科學經濟等々に關する世界の不朽の名著は固より、苟も人類文化發達上重要な役目を果しつゝある書物は殆んど本書に蒐録されてゐる。

世界名著解題は、單に書物の解題ばかりでなく、その内容を簡潔妥當なる筆致を以て解説し、加ふるに、原著者の略傳及び、その遺著を犀利な觀察眼によつて記述してあるので、原書を讀破したと同様の効果を擧げ得ると同時に、人文發達の歴史も不知不識の中に味知することが出来る。

世界名著解題は、以上の外にどの一篇を取つても興味深き讀物でもある。然して、これによつて書籍の概念を得、讀むべき書を選択し得よう。力と時とを有つ人はその原書を、然らざる人は味讀し得た概念によつて生活内容を豊富に、精神生活を更に向上展開せしめることができる。

世界名著解題は、諸氏の坐右にあつて、人生の伴侶となり、知識の寶庫、精神力の源泉、子孫へのよき贈物たる使命を完ふする。菊列全三卷に壓縮された人生の糧、これこそ我が國出版界空前の收穫である。

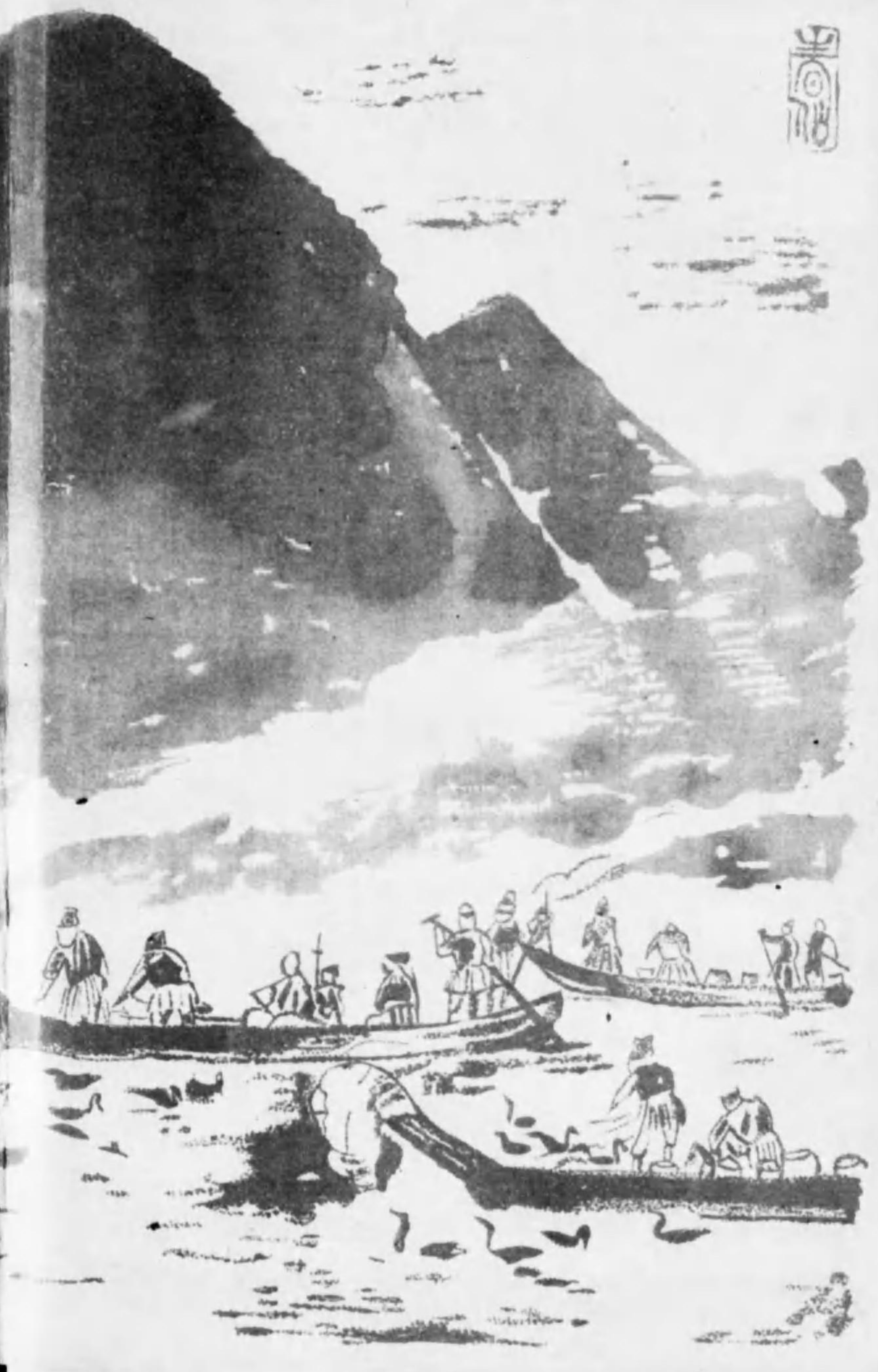
各卷菊判平均六〇〇頁・函入豪華版

一兩卷定價四圓五錢・三卷五圓拾錢（二十錢）

415
95



95



終

23

